播州名所巡覽圖繪

三

ル 4
3665
3

ね4
3665
巻 3

播磨名所巡覽圖會卷之三目錄

土山　慈眼寺　高砂寺　高畑村
安養寺　新在家古墳　撰磯寺　教信寺
平堂　開山堂　教信上人墓　徳樓　地口古墳趾　平地村殺心僧　衆武部墳
具平親王塚　下居清水　日岡大明神社　古子岩
二塚祠　常楽寺　崇神天皇陵　七騎塚
中澤村塚趾　妙見大明神　天満宮　常住寺
五社大明神　加古驛　加古松　加古路　加古湊　加古渡　二見浦
天満宮　観音寺　瑞應寺　徳源寺
長徳寺　假寢岡　福勝寺　住吉祠
松元寺　福里村代神楽　蓮花寺　住吉祠
砂子大明神　愛彦御古墳趾　別府　住吉明神社

本間文庫

枕松

法〻奇瀧
尾上天満宮
養田社
高砂
荒井
荒井神社
十輪寺
稲荷 伝吉 八幡 我社三基
本堂 観音堂 不動堂 護摩堂 鐘楼 経蔵 南仏門 天神 客殿 日西上人旧跡 天竺徳兵衛墓 鶴林寺
観音堂 不動堂 日 三層塔 稲荷社
祖師堂 南教寺 白蓮華 経蔵 畏沙門 天神 客殿
本尊 観音堂 不動堂 護摩堂 鐘楼 経蔵 南仏門 天神 客殿
三社神 稲荷社 山王社 三基
迦大明神
常光寺
稱名寺
高園寺
常親寺
龍泉寺
八幡宮
赤松政村墓
加古川城趾
印南郡
石寺古城
加古川
泊大明神
牛頭天王
印南浦
尾上松 伝吉明神河 行基松 太原大明神 古蹟
今津川
大川
高深 大鳴 鈴鳴
高砂神社 本殿 鈴殿 神明 茶堂 古神宮 秋葉 金毘羅
高砂城趾
高砂祭
園長寺
天満宮
石舩
宝蓮寺
養田社
高砂泊
本神崎
本村城跡
八十石陸
腰掛岩
真名井
神瓜村
龍山石
龍墓
大輪塔
安養寺
聖原寺
高座石
曽根天満宮
鶴岩 伝吉河
鶴田寺
伝伯寺古城
毘沙門岩
石室殿
阿弥陀寺村
時光寺
佛心寺
加茂明神社
極乗寺
蓮敬寺
松笠浦
弁財天社
宋田村
石屋
神吉城跡
妙見大明神
生石明神 生石明神 伝明神
石瀬弁戸
大日寺
鬼神塚
法華寺
高座石
満の井
圓通寺
金剛寺
八十河原
鞍馬寺跡
石井清水
石舩
生石明神名石
石舩
白矢系師
六孫武者塚
伊保崎
細堂
曽根松
松笠山

大塩　天神河　三ヶ寺　的邪　神河三基　寺院三ヶ寺　大華祠

海岳寺　都深野　古敦葦　赤松法法墓　大澤清水　大曾村　法華山一乗寺

楠山石　八家地蔵　敏恩寺　赤松上総介墓　観音寺　助永池中塔　唐ノ塔村　志吹ノ祖

的邪天満宮　神木　桜　寺院　赤丸天祠　澄笑石　若一王子拝殿祠　園福寺　天神山古城　高御産山

大楽寺　七社　拝殿　安楽寺　八幡宮　長楽寺　鷲巣山　本堂　紀者　赤天　妙尺　毘沙門　法華　三層塔　鐘楼　岩紀者　御親者　輪蔵　奥院　法道仙人廟　来止標石

播磨名所巡覧圖會卷之三

加古郡

土山

海辺にて加古郡　慈眼寺　海辺の西　北浜村の

遍照山高祥寺　月村　又名　高畑村　古山の西

奥に系を引き庵寺諸國より集る　雲生山安養寺　一名村

新在家古墳　延長二年又曹ヒ　侍ふ松樹と記す　足利尼馬改義氏の墓方り云　郷人を後源堂の隣

横蔵山横蔵寺

寺記に開基法道仙人之天十八代小松天皇の御祈願所寛平法皇船居ひ伽藍建

當郡十の坊舎ありしを岳史ようて今一寺一坊観音地蔵の二像華田の國

伽毋ありし観音の霊記に寛又墨ひ一名横蔵の観音

念佛山教信寺法泉院

教信上人は元亨釋書及び往生十因に

又氏元信の手うと伝書し信也と今清浄堂園のる僧之清和帝

の御宇うと封境廣大なして僧院又十餘坊あり寺仏八百石又佛供料

三ヶ貫と賜ふ其後兵火之罹り田畝之及ぶ又崇德院の御宇之又百石

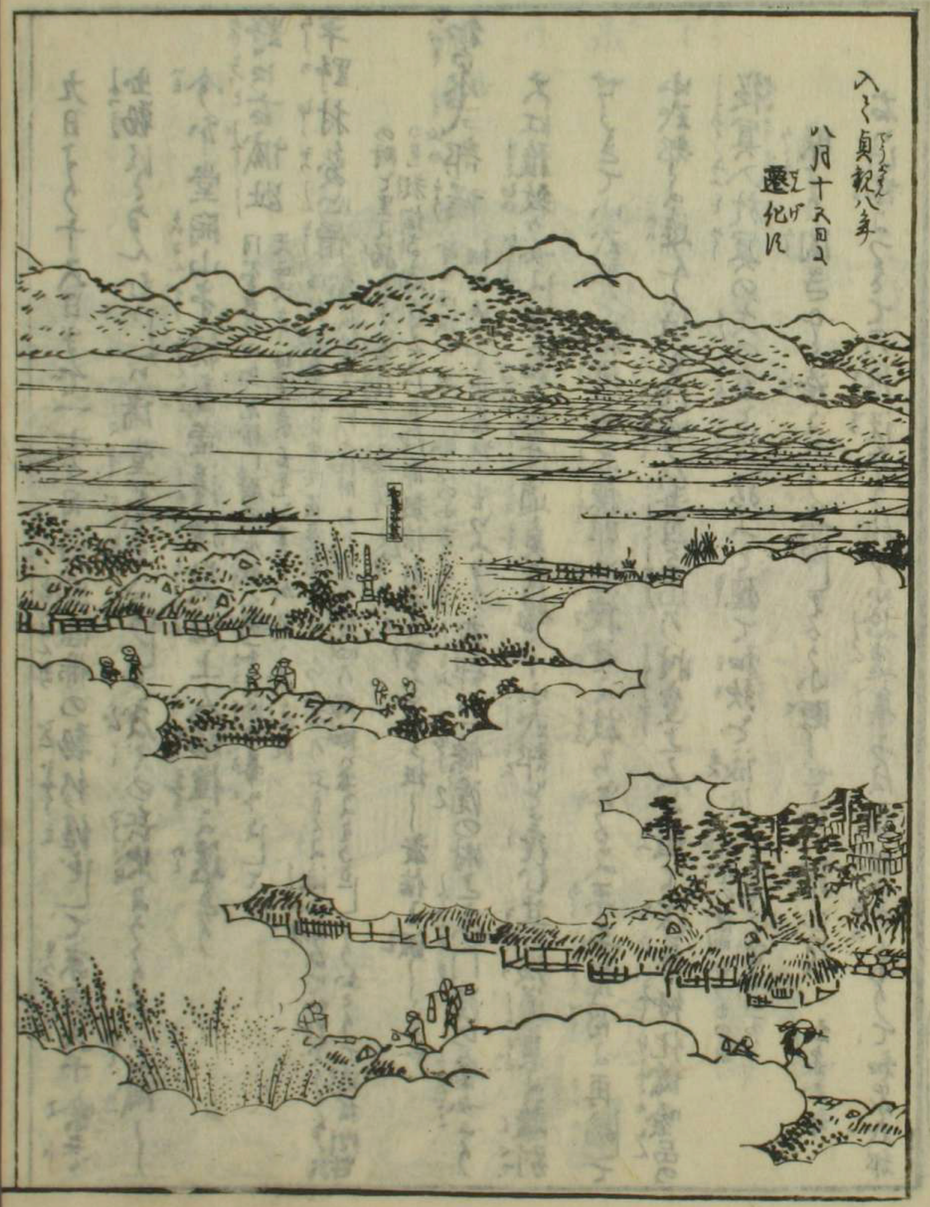
を賜る國中の人民此道場之集り念佛修行忘るゆ也又後源

堂院の御宇三百石と賜り山附清玄宗西山流義と如ふり毎年八月

念佛山

教信寺

開基教信上人は
阿弥陀如来開山
の教信上人の御首
と安置仕候
寺源之日く
教信上人は人皇
四十九代光仁帝
の宝亀御年十七
の時南都真福寺
を捨ひて出家し
夫より諸国を廻
遊し踊を
加古郡印南の地に
て傳り念佛三昧を



八月十五日
遷化仕

九日より十八日まで一七ヶ日の間念佛の勤行怠りなく出勤はとうむしい諸堂厳重にうしが茂りの長出ようりて乙減〜

今和堂開山者親鸞堂達樓教信上人時僅に遠ようり

野に古城趾　日蓮聖人に郎左衛門尉の居城と別て長浦の幕中にして天正六年北条氏滅亡の後荒廃と成ぬ

平野村教心僧　西行撰集抄に中に摂津国平野にありしと云ふ僧ありて平野の時と星に弱きて命終を遂ぐるとき即教信に帰依遂ぐるとなり

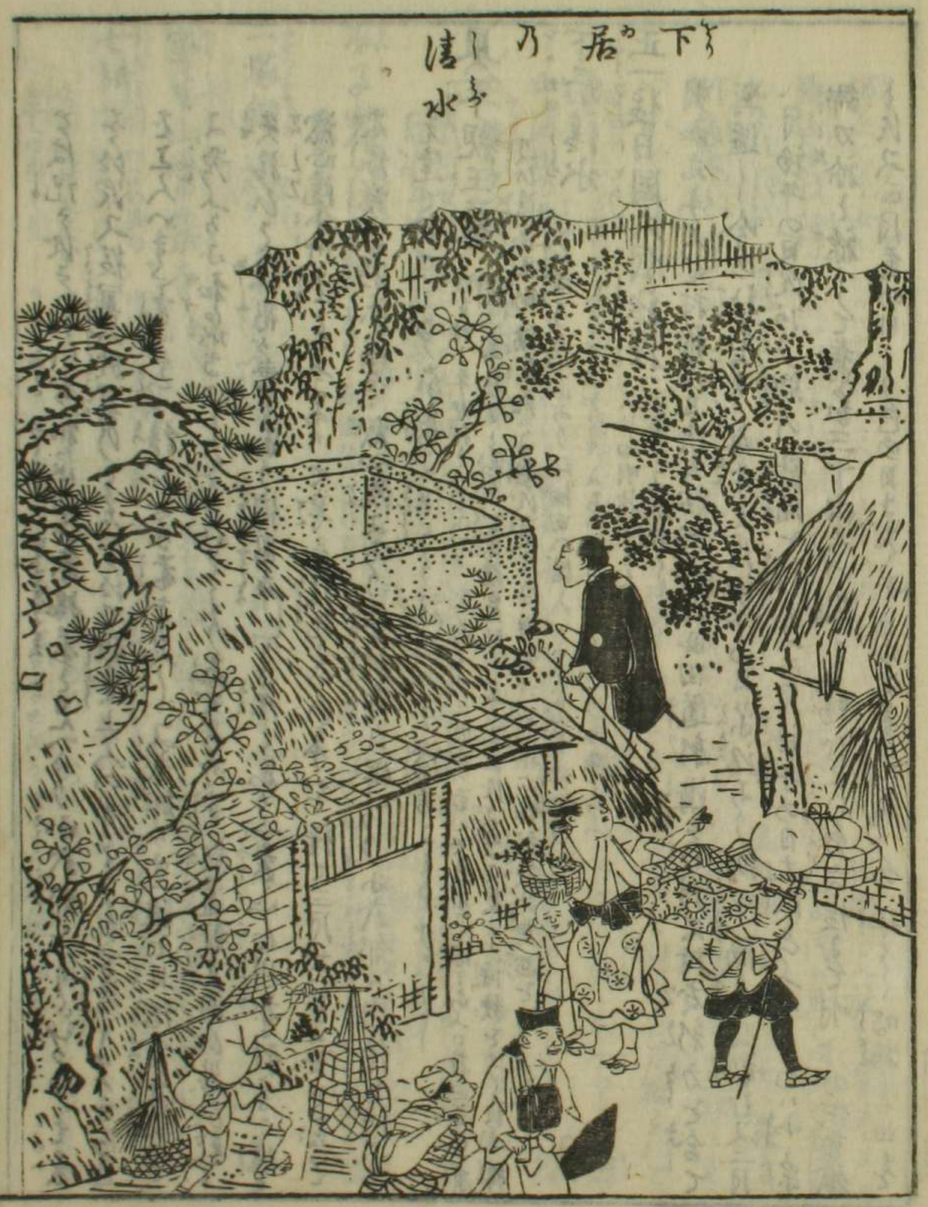
和泉式部塔　是に西坂本村に海辺の小丘あり　細田坂にも下居坂にもいくつかり　武部が一條院の御上東門院の宮女ようり

大江雅致が女にして和泉守道貞に嫁し小式部と養ひ其後道貞に離別せしとて小式部と摂津国赤穂郎若狭地に放ちやるに平安保昌に再嫁して小式部と遊んで此百人吟ひ書写山の性空上人に値て法華経化城喩品の後冥入坊冥の文の意と悟ると人を徳て和歌を詠じ

（紫式の源氏物語の表　和泉式部　清水の清曲物語の表）

曉より闇きやみ迄入りぬ山の端の月

右に此塔のつきての傳説なり拾遺集に雅致の女とありて和泉式部



こは記されば此寺和泉なる赤塚氏と見へたり小武郎とりくしりるを云
なるべし又後冥入於冥のこころをもて性空上人のりくのようにて生〳〵るとにはも
て上人いまゞ書写し人移らざる者なりゝ〳〵武郎がは源と日記家集なるべ
し考へるに和泉なることそられくようるるの御手敷道親を通ひ給ひ親を
失給ひく保昌が妻なり保昌卒し尼となり一条小白川撰観寺に住る
瀧心院小御堂〳〵ありて尊元法尼とつひ年を経て三月廿一日に世と云を
本像信永授赤福寺瀧心院あり撰観寺に埋らる小武郎は内侍を
先達て死せ〳〵り家集に詳なり橘州の手諸書にこれ〳〵

昊平親王墓

故平村と平井村との境小高き所にあり一条院定弘七年に薨じ給ふ人の村上天皇廟
及び陰陽医御諸技藝に通じ真字伊勢物語新撰六帖弘決外典抄を作り
下居清水　右石塔の下にあり又細田の清水ともいふ也昔海水
此〳〵あるりけるくりとちのさき故あり

正一位日岡大明神社

又白明神ともいふ大和
明和元年大地村狗屋と次兵衛河原村西田道新溝の口村大村友彩力と合て
再造〳〵今の社地なり毎年九月初午の日祭礼あり郷中隔年に勤む又二月
八月初午の日既にあり郷の飲酒と燈を又正月初午の日大阪とくあり是は小家
郷刀祢と祢〳〵て奮起三十六人の因より勤むるれ各六位まて明神の供奉職
とて又正月丑の日より已の日まで七日の間丑籠りの祀とく唱物書曲を

修正て下女下男い古郷へ久〳〵大い他郷に緊き給ひ氷室山に放ち家内
浅ゝ溝に池を掘て茶柄板の乾ひ茂葉と縄ひ言泥の耳に敷て麦を
出さて用代は治るまゝ忌ちうて厳重なるゆ一圓の例とした濁ちる麦も
別当神を田中の松石の神盟より一の名居へ出仕ひる先を俗に御子祭と
つかくて撞撞を期として忌を脱ひ翌年の日を平明とひて村あり刀祢らを
執行ひ此外又節の武い悪く刀祢の役と忌籠の間に紅既講とくありて講
中迷田の溪へ出く被漢〳〵ありて神楽を奏ひ先を社勢の神楽とも云刀祢
の一族を〳〵〳〵明神の神を比とく今い是絶ちるとく刀祢い物の既のゆ

武蔵此七日の忌籠い神の生ゆ浅人流ゆ比所ゆ
ゆ見れ浅人先久命ゆ〳〵て神武天皇の見えイジセ イサ、お国と名ゆ三神おゆゆゆゆ

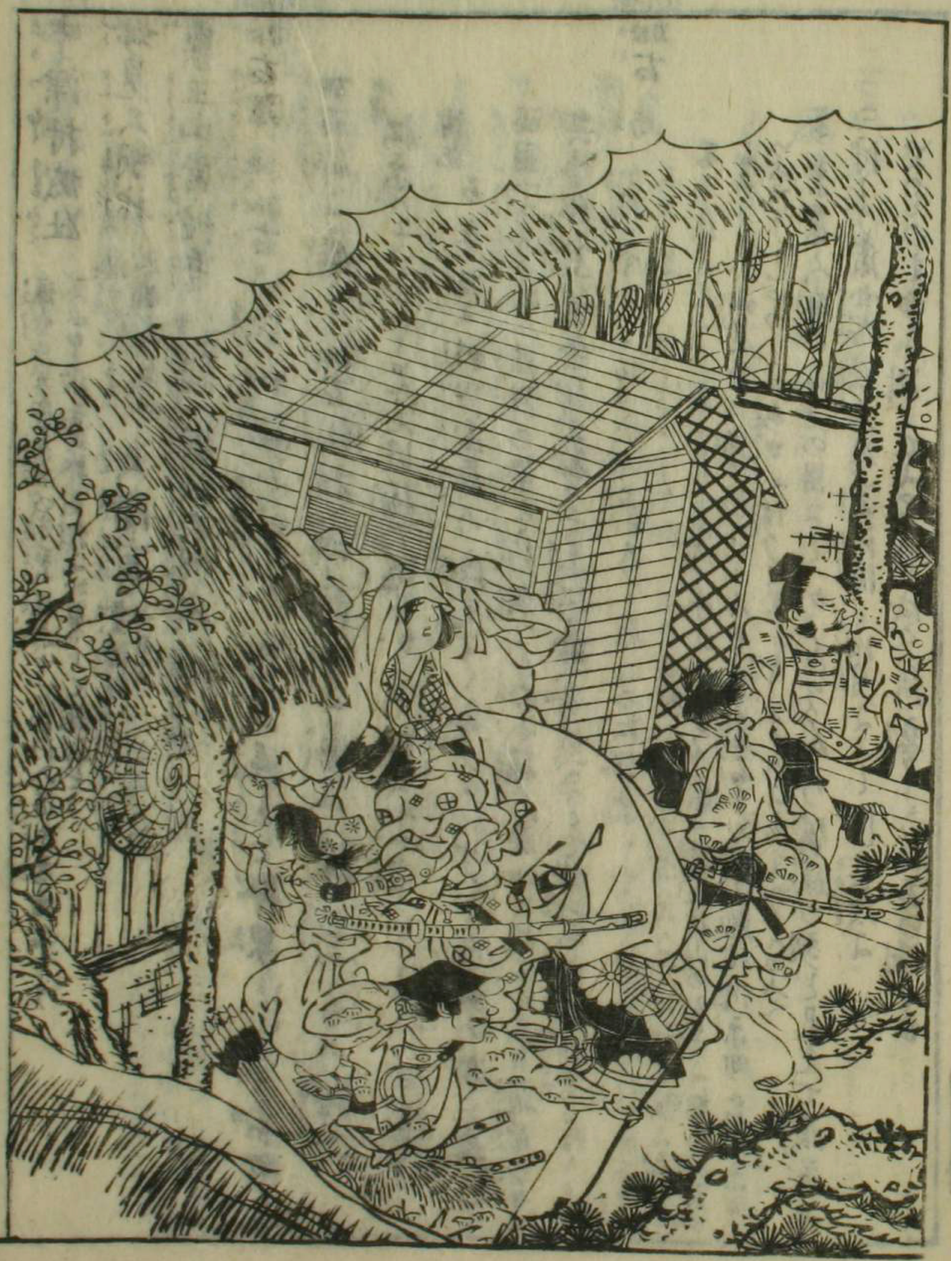
ちゝ子岩　大地村の下加右の溪〳〵の上にあり〳〵て乳依ひりい渉雪を乳ひりり味うれを産石も川辺ゆ〳〵在上ゆ
の名ある乳

二塚村　二塚村にあり　**祭神**　稲飯命ゆ〳〵て氷室五柱命の茅之

安生山常楽寺　大地村○出宗神天皇陵　平日岡山ゆ接ゆ日本紀ゆ山辺通ゆ
陵ゆ〳〵へゆ比ゆ記ゆ赤其流とん

七崎塚　加右の溪の西ゆあり　○　境清ゆ貞滝去て遊て妻ゆと良縁ゆ死け先へ陵し〳〵ゆ〳〵橘ゆの陵山ゆて進人ゆ
出会い我いつて二族山城牛宗村陸治ゆ妻ゆと親類〳〵切縁ひ其外廿三人家ゆ今を
切後縁北ひ〳〵ゆ〳〵比ゆ七崎村死〳〵ゆ〳〵ゆ退人ゆ出ゆひ七崎村死〳〵ゆ〳〵ゆ其を
出雲の国ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ其後高貴出雲の国ゆあり下ゆ名ゆの先を出て〳〵ゆ〳〵ゆ切後ひ

七騎塚
陸奥刺客三人の勇
六郎義勇をそしめ
其人愛七騎家子戦死
七人の勇士雲州へ
逃さ去ら
しび



中津村城趾　鎌倉権五郎景政の末裔鵜沢十右衛門入道宗居城なり
天正中織田武部勇敢なる加勢して詰城を
妙見大明神　溝口村にあり　天満宮　栗津村
米蔵見とあり
薬王山常住寺　寺家町　五社大明神　寺家村
人馬大久保の駅なり　宮ヶ瀬の駅なり
加古駅　希　加古の松　小川の流れと郡界とし寺家町を
加古郡と屬し加古川村の印南郡と屬し二郡家ときの駅なり
松原にそこそこ見えし橋ありしかのむまやの事なりして　末大納言
附記　古平記に新田義貞の庶兄なる一方余殘の勢を率して
西國へ下り後陣の勢を待綱の広國加古川に及日逼前なる
其勢都合六万余騎なりて赤松が城へ寄せて湊川の宿に押寄せ
加古郡と屬し加古川村の印南郡と屬し二郡家ときの駅なり

加古島　此海い今みな陸地なり　加古の湊
みなと近く綱
石なり赤い水尻村と綱の浦とあり　今の石なり人中測村川原町家川原町と
つくりそこへの中の堀りて里なりある丸と名付くるなり
家系集人麻呂石見の國なりと付り覇縁の歌と見えて浪華の
三津より處女塚淡路海浦と次第なり其次に
つくしのもゆきとどくて行き〜き加古の湊

所名

とうとうていうとの浦に二見のうとそれを紛るがてる加古の湊のこゆるとみ
掛るる砂加古の訓おぼくり家系集に加古ありてるの浦に
尾上ところ名い海辺の砂に似たれ
り砂ともみ久〜き松の多く生ひたるが住吉のけうと松原と似たるを対う
ひたるうるべ〜けうと見の松原い今の安之町みて明神の森う洲波長
く海中へ折出る式後世埋て今のごとしさんが加古湊の山も見る月〜うとし

かこ川島　松原にしるしるのあるるうくしまと見
うこの湊松原こ〜と見渡せいかり明の月ようを眺る　後拾遺
うこの湊松原遠く堤やこ〜ら　住吉社歌
うのさうもるこ〜ろを眺るる加古湊の松原遠く堤やこ〜ら　法華経
さしの原る加古の湊の夕汐ゴ松ちうとしてみるるくすう

加古湊　ここの入ここ〜今今市川の今川と川末の流りさる有りうる砂の茶の太川と
また一流ありこ〜も見後の湊ありいわ〜への湊い今の駅ときの上ちべ〜湊い川末うて海の方へ
入口にあり　末の諸説唐村とも淡路とも
天皇淡路の行宮　淡路の特〜移人時西のさうう新十の唐海ようう
てんせ〜北移一之屋の茅さう藤の草と衣屋之茅さう新之こんもこの日四國の牛
猪ようう帝之娘　長屋とあるこ〜ら　長屋　長屋
号け藤の水門〜ら人をべてあるる松まと藤ゆ〜ら人仏茅ようこ〜
見又上ここの入るこるこうう後ゆうこ〜ら
こうこうこれいうこうりのひまくはこ〜

加古渡　松ちうとしてみるるくすう　法華経

日丘社（ひをかのやしろ）

延喜式神名帳云 日岡坐天伊佐奈比古神社 加古郡小社 相殿 不葺合尊 玉依姫

（濱）

我心あふ子乃浦りの綱手縄たゆる心やむときもなし 撫倉

うちはへてかこみ浦りにひく綱の絶ぬ若に往せるらん 隆季

加古驛 今は加古印南郡界と蹟寺家町加古川と號す 此より上は加古駅と出しは寺家町までなり

（濱）

二見浦 郡中東の海辺にあり今東二見西二見の二村あり又伊勢にも同名あり 和歌深雅しては多明るしりぬそ 是は播州の浦と得てまつれ

古今 夕月夜おぼつかなきを玉くしげ二見のうらはあけてこそ見め 兼輔

名寄 玉くしげ二見乃浦の明るあけがたこそまたうらめしけれ

天満宮 東二見にあり変ぶ社とうせ給ひしまつりを

補陀山観音寺 上と同 西にあり

瑞應寺 東二見にあり

徳源寺 上と同 西にあり

長徳庵 上と同 西にあり

仮寝岡 二見の西二丁ほど あり俵と伝あり

萬年山福勝寺 古宮村にあり

住吉祠 古宮村の 二十二社の内

潮音山松元寺 同村にあり

福里村代神楽 曲御よの頃下此村より出て当社神楽の名ある 伊勢太神楽と化せり

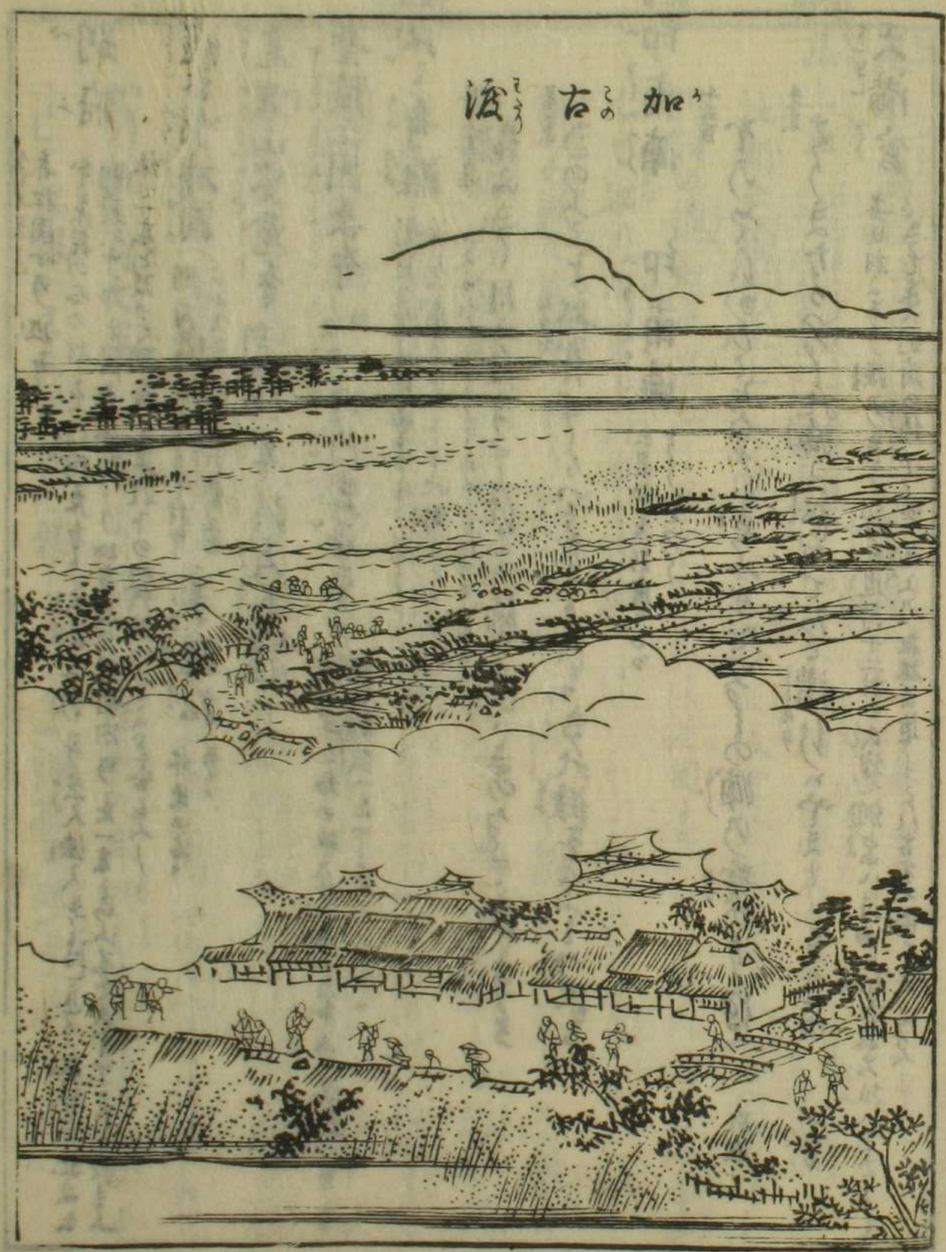
青雲山蓮華寺 本庄村にあり

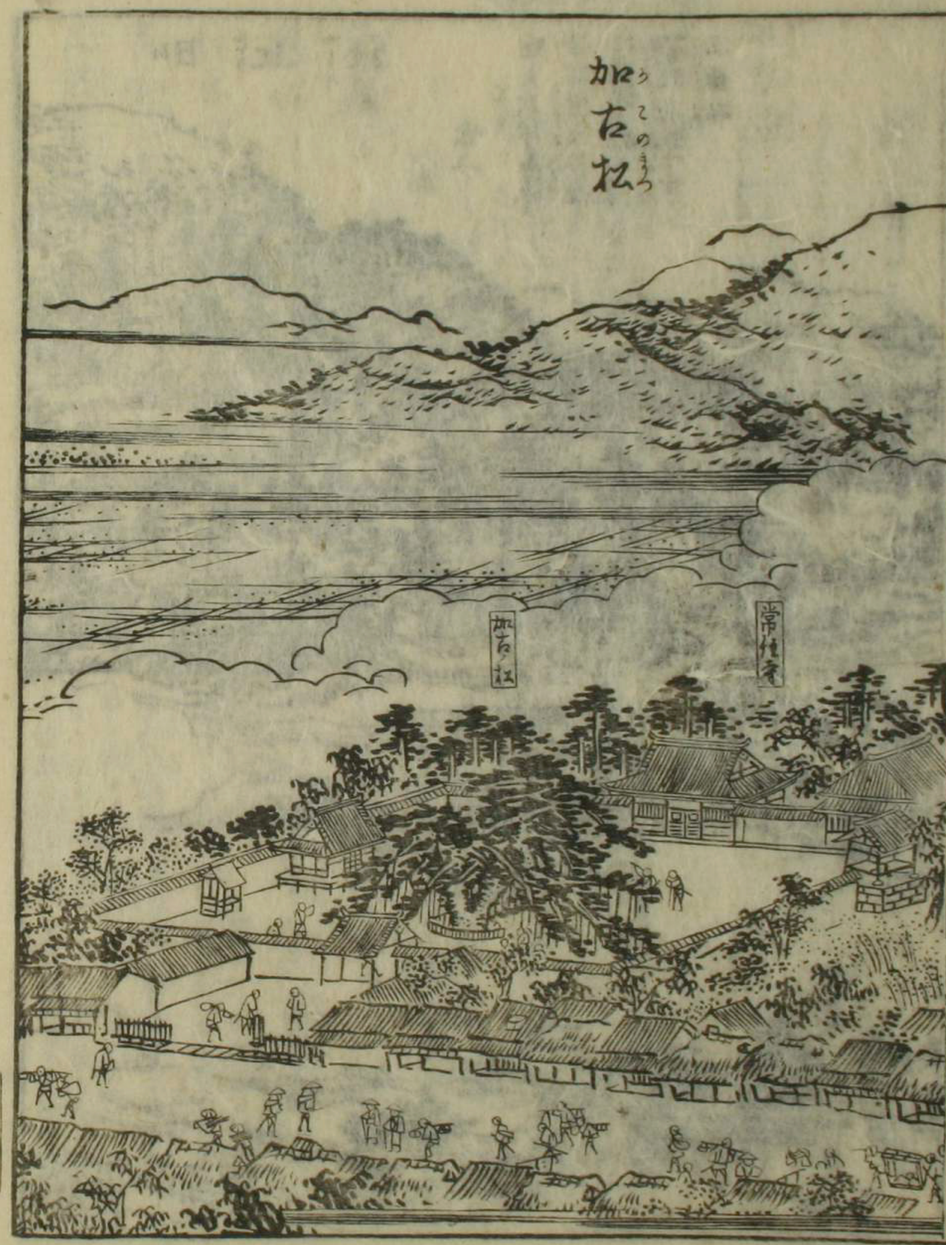
住吉祠 同村にあり

相生大明神 長安村にあり

素神大己貴命

大納言季房卿古城趾 大西村にあり 今は又田方原と城あり其城地のごとし 季房は村上天皇具平親王六代後三位中流大納言と伝す 飛鳥天永二年入月播州の守に遷織くして加古郡より白川積を東播郡赤松の辺に城と築き白旗の城と呼り


加古の渡


加古の松
加古の松
常住寺

別府
赤松円心の城跡あり 本荘村の西の村なり 阿閉荘なり 大嶽寺記に云 別府八十郎といへる者赤松より加古川の辺阿閉の荘一本をへて五十丁をたまふ 依て一本を改めて別府といへり 下の八代村の条に見合すべし

住吉明神祠 別府の浜辺にありて村中これを崇敬す 祭礼九月廿三日 手枕松 祠前の右にあり

光明山宝蔵寺 別府村にあり 牛頭天王 当国村宮

聖陵山円長寺 長砂村 境内岩屋あり 寺宝千手観音の画あり 大十三本あり 明国一寺 池田輝政へまいらせしと云へ

ひれ寄灘 別府の前の海なり 万葉集に日ひれふる灘とよめり いなみの浦の異名なり

忠見集
君みずて月日はあまたへにけるをひれふるひゝきのうぎと恋ましてる

万葉
きのふこそ舩出はせしかいさなとりひれふる灘をけふ見つるかな

印南浦 印南海 二見の浦 別府などのうしろなり

千五百
かこのうらにかひをそこにいるまで…その浦の蜑のりほし 顕昭

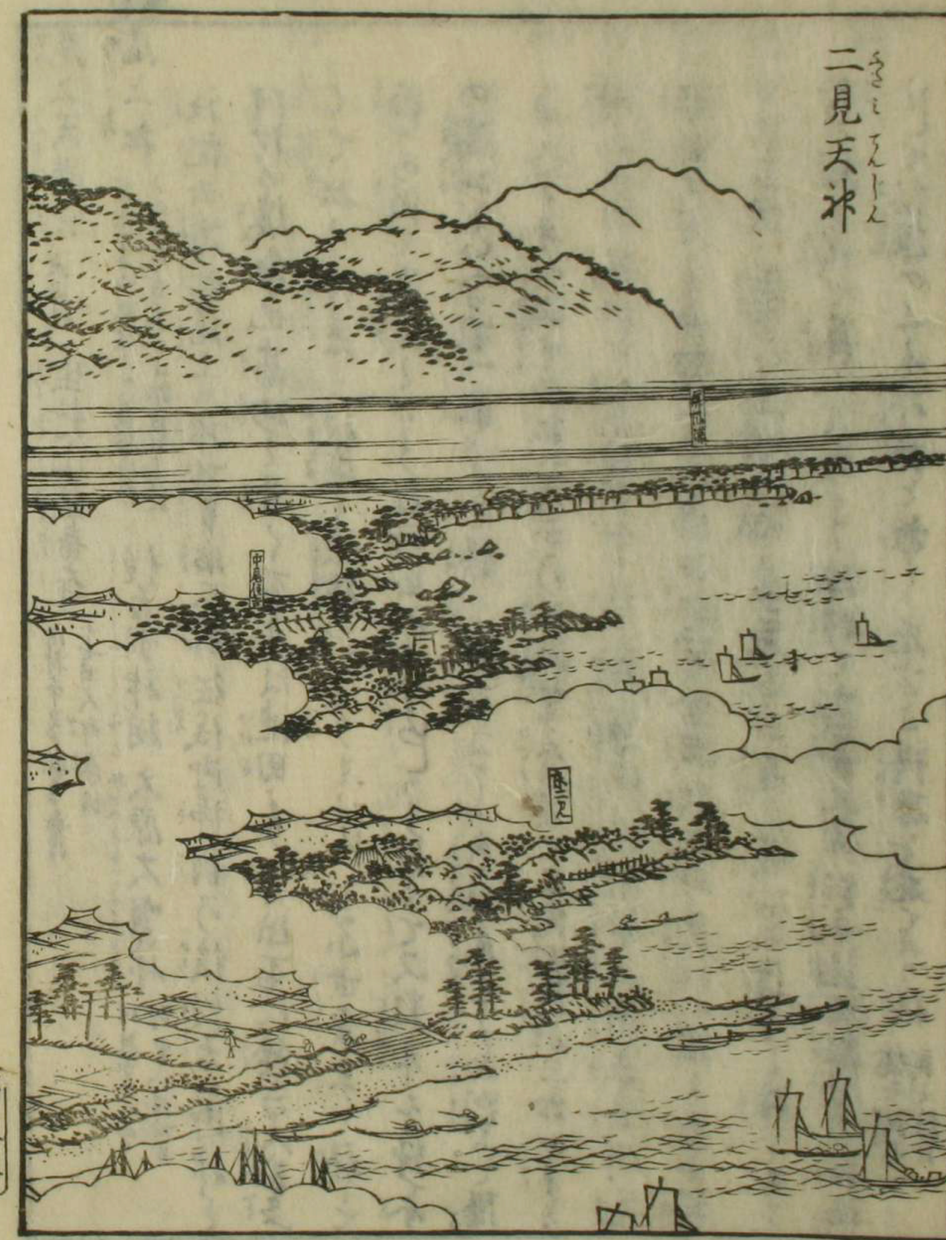
夫木
ありまなるいなみの海に舩出してたつさ漕行ハやまとしまみゆ 中務

天満宮 安田村にあり 浜の宮と称ス 近郷十二村の氏神なり 例祭八月晦日 此松林大抵八丁あまりもできて東は別府の浦より西ハ尾上の松林に近し こゝに東の当下に見るべし

尾上天満宮 池田村 生竹山観音寺 同村本尊観音 十七日人群参す

尾上松 此所方の松林にて長田の荘にあり此所の松林を尾上といふ 住吉明神祠 大原大明神 同村中にあり 例祭八月廿日

社記に云 播州尾上は神功皇后三韓征伐御帰朝の後住吉の御神と同村の鎮座也 高砂と号く本来は池田より北に此所に続き人家多くて船の往来も往近く漂泊のたよりもよろしき所 世変多を積て 湖の波も遠浅となり船の出入もよろしからずして又数年を経て今の高砂といふ所へ家ともを移し 同所を新しき高砂 尾上とハ別ちて隔る事八丁斗也 桐生の松は天正の比羽柴秀吉三木城別所小三郎と争ふ時小三郎殿ひきを毛利輝元に請ふ即芸州より小早川隆景吉川元春両大将として熱勢三万余騎兵船二百余艘明石郡魚住の浦に着き根を三木城へ運送の後諸の為に熱軍今の尾上高砂の辺りに陣をとりかの松を伐て篝にたきより枯枯て慶長九年領主池田輝政の命として枯根のうへに神祠を移し左方に鐘楼を建てなりと云 枝及祠の跡に残れ


二見天神

別府
往吉
松い沖にて幹い猛虎の
跨踞のごく
枝柔い所移る
仙人
周りに十歩
耳ハ二十歩
たさい丈余
寒ゑ猛き年しも
あべき霊本
ちり

社參
瓢水
なゝ遠く
帆い客ゑ
今朝り
瓢あい仏別府の春ゑて
瀬修行者民城賢聴海い
衣那時之修後篇
ヨ人ゑ

或云高砂尾上ハ社記にいふところ今の浜の天神八丁斗の松林より今の尾の上
なる故へもろ直の源林広大にして暉き波にいらふるゆゑ住吉の浜に等しき名所
なりつる其に住吉高砂といひて謎うりされば謡の高砂は松老の名木と一編の細説と
して作りたり拠るに是古今の序の意とはたがへり古今集序は
子どものうちにませく人をとひ松もむかしの友と云のびる砂とし江の松もお老
のやうに物おもへ云々
思ひは高砂住吉ふはなつき松のみ殊りいたく久しき物のためしにひく老人の身なるとふは
我よわひの久しきと松のよわひの久しきとくらべて互に老ぬるの心とよむがゆへに相老とへ
いへり又其松とされ物ハ万株の林といひて一株とさうれるにあらざるに此瀧偶生の松と
相老の松と名付しハ後世の誤りなるべし人の老て世に久しきと両所の松をいくしく比し説歌に

古今集
誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに　　藤原興風

同
我見ても久しくなりぬ住の江の岸のひめ松いくよへぬらん　　よみ人しらず

同
住吉のきしのひめ松人ならばいくよかへしと問まし物を　　よみ人しらず

あるさにもあらぬ物からわりて浜に心をよせてさのみぞ名にもたかきゆる松
いつまでかくと思ふるれは枯て久しくなりぬらんとぞ

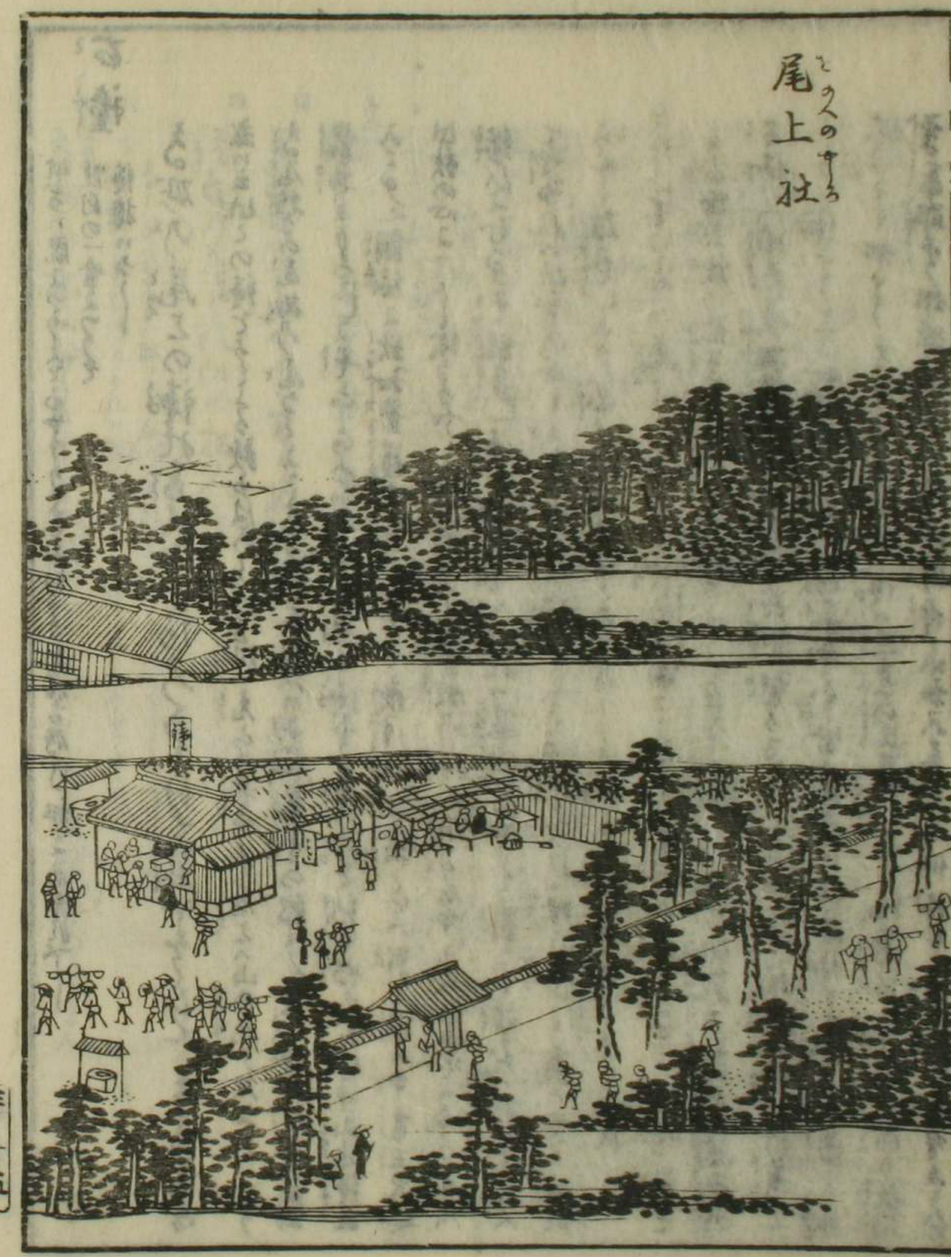
夫木集
高砂の松に物いひて立波のかへるけしきは我身なるらん　　後撰

古謡

此うたは既にいふ人をあやまりてうたふに似たり尚加古浦の部にも見合すべし
謡曲の一条によりて
詩様はなし

高砂の尾上の鐘の音すなりあかつきかけて霜やおくらん　　前中納言匡房

或ハ云此この鐘をよみたる歌ハはじめ高砂ハ元山の異名にて尾上ハ山の尾さきをいふ
なる尾鐘の尾のなるを見ればよく考べし右の歌は千載集冬の部にて寺の鐘の頌にて題
紫朝之くもりて雲の内の漢あり寺の声の鐘を聞て思ひをいひし此ハ山海経に
あるを朗詠に歎和豊嶺声音とよみしも夜に似て秋霜ころふんとよめる中書王の詞
此歌の心にほぼ似るべし云又一説に云豊山の鐘の鐘の声をすみわたるべき寒き霜の鐘の声に
継ひよむなる例多し謡の歌の数は盡ざるとよめれば甚だいたる物なれ霜なへて浪秋は別て高き
て実あれば此寺の心もえるきこの晨鐘もきこえて尖あるければ曉かけても霜の多く置ぬ
らんと推量しうる記れ此謡の歌とそふるもの次のまゝならで見るべき条のゆゑに示れ
○さて此の名の尾上よく云ふに叶ひつる物から牽合付会の説とみせり故謡にハ執て
古事物の曲雑の様をせ名ならう漢製にして日本の物にいたる也此巻九加田山寂林寺の
古鐘ハ浪花長柄霊隠寺の古鐘其製頗る多く三本としも読の傍に何篆の
とらへ付よりさに記るす天人種本の座右余慶模写の詩拜まで何をも篆して和
文言をも加へてかゆしに長柄の鐘ハ延享の此長門国の撞木鐘語へ拓得て即ち長に
至来御家郡御松江山善源禅寺永和又年己未仲呂日と繋付て其寺にかけ


尾上社

たまへが衣ありて浪花に遷る所あり按に太平十年の年号抑がたきにまえ
より是西晋二世恵帝の時にして日本寛政九年まで凡そ三百九十九年に後銘
の日本永和又年よりは百余年之先を以て尾上刀田山の二鐘もとより是にも
百年来の物とは見えざりされども百済より仏経を始めて日本へ渡せしは欽
明天皇十三年にして凡そ二百年に余りあるべし欽明天皇八年より内裏に鐘を
造らるは又六十年余後のことにてそのほかは鋳工ある百済或は呉国などのものを
徴まして造らしめ又は彼土よりも求めしならんが鐘などは尚まれりかの往昔年に
入る天王寺六字堂の鐘よりいにしへを訪ふくは漢流の鐘にてはなく竹筒の形に
物もあるべからねばさるに諸宮よりよりしるなどの流は三井寺俵藤太の君に似て
児婦の耳を録れのかへされども年経りの久しき物なれば古中に埋ま海に沈みし
されかまじきなりともなかりし

石松（いしのまつ） 尾上林の田の中にあり俗にあまの小松といふ それとも云ひて又むかしの石棺の蓋なるべし

養田祠（やうたのやしろ） 岩田村にあり此所の氏神とし祭神三座 素盞烏尊 稲田姫 大己貴命

今津川（いまづがは） 尾上高砂の間を流る本より川あるもあらず往来もせんは此上の渡し場へまはりて高砂へ

埼宮（さきのみや） 大さき村にあり 祭神八幡宮

高砂（たかさご） ある砂荒井小松原など数ヶ村を御厨荘といふ

大川（おほかは） 加古川の下流東にて海に入

津国今宮の両側に似より流るに慶長六年
丑年当村祠造営の時まては民家は今洲にありて宮家の侍尾上高

砂の間之其後宮家廃して民家は移り諸国の通商大湊の湊となりて
大廈つらなり又に川あり下は海あり舟船の出入に便よくして繁く交
易ほえより本邦出郡の名所なれが名にし負ふ風流の名家も多し
今松林を倉庫に換て風藻を没めしは惜むべきに堪ざりされども名
所の旧名を抱きしは是南朝の神璽守護警固のごとし

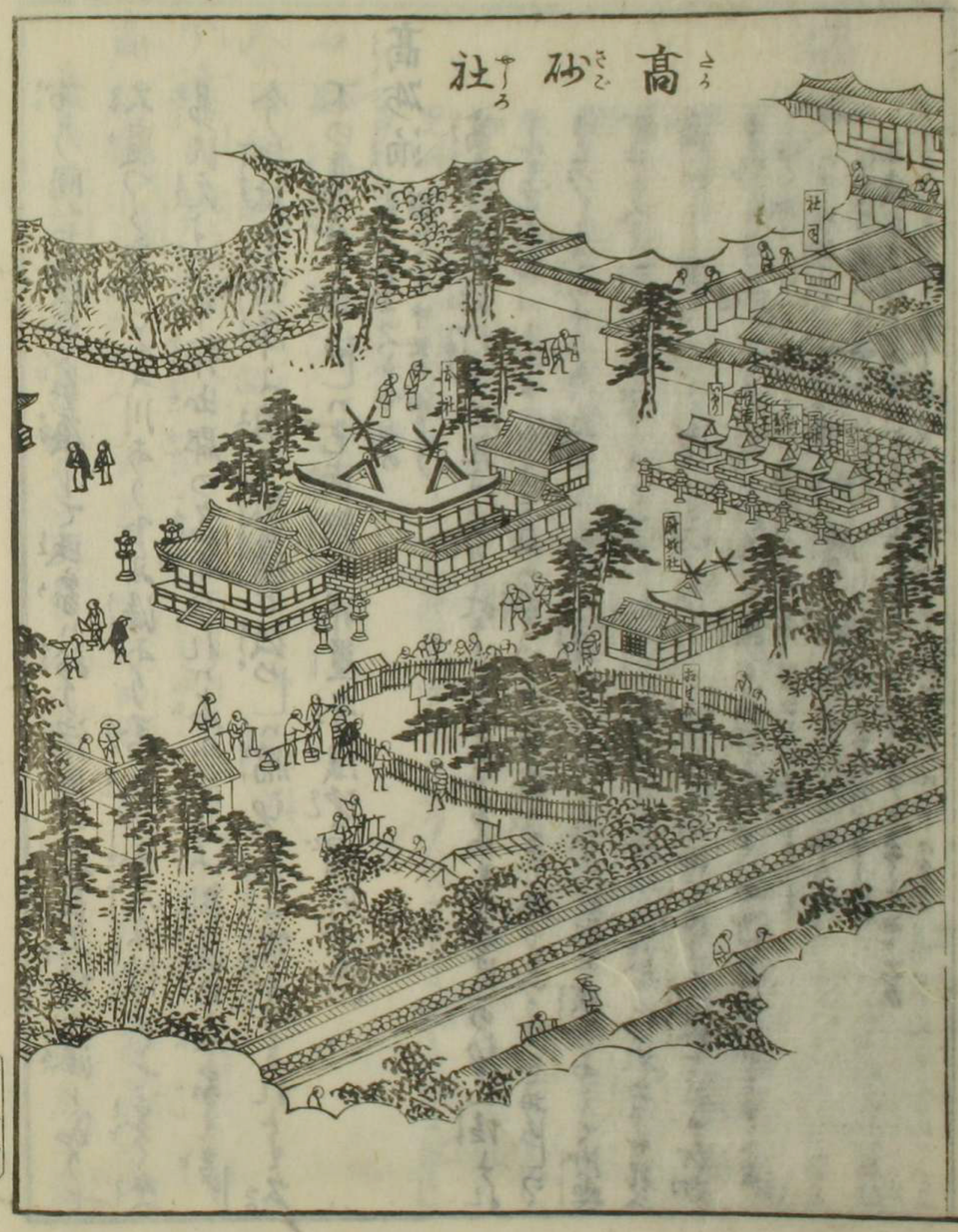
高砂泊（たかさごのとまり） 是又ようへる今洲の浦にして中世の泊なり

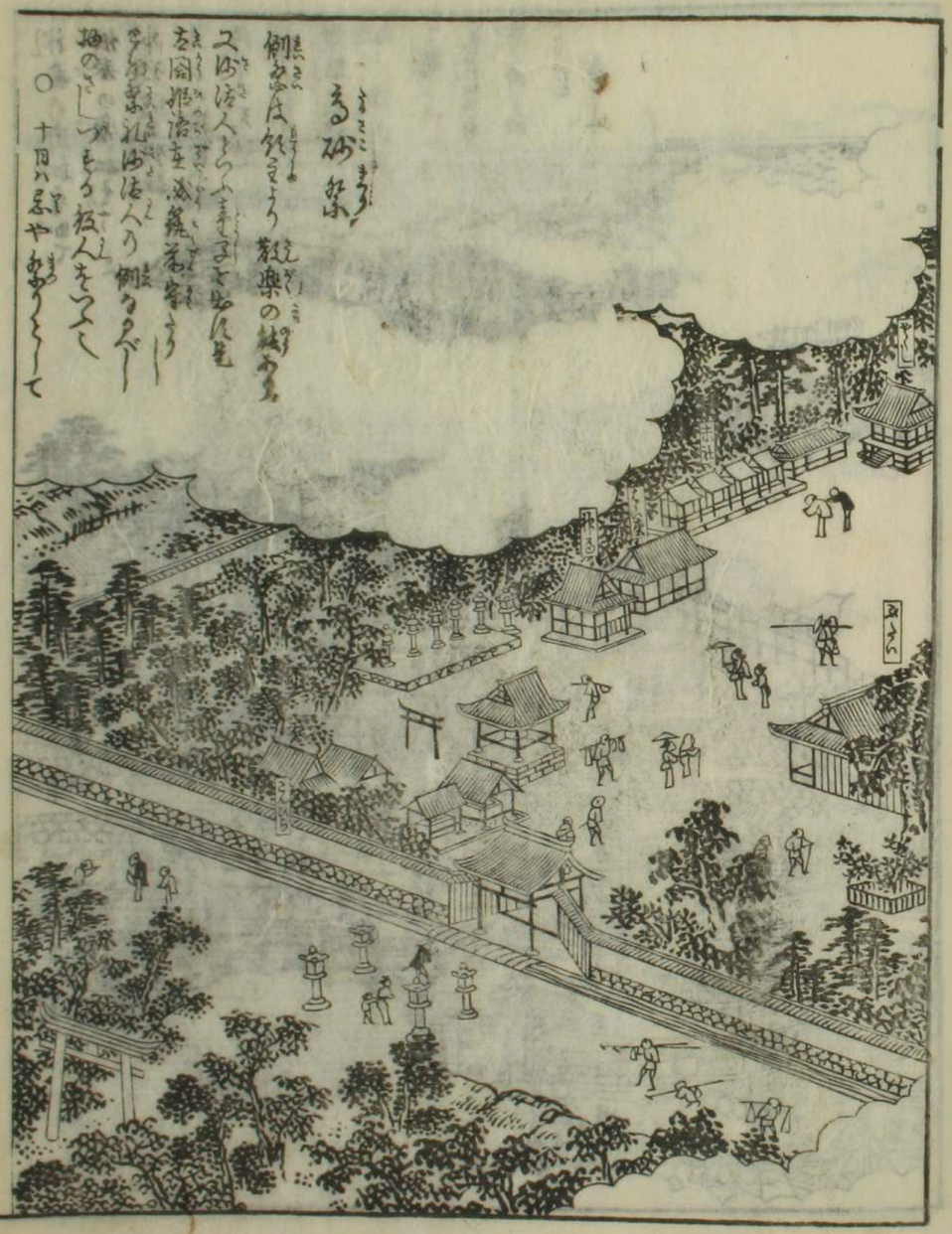
高倉院厳島御幸の記に行くゆくもしらぬ京のふるさとむかしの昔に
なんもいひ出づるころの時によるおの泊につかせ給ふ明方の舟どもゆりをおろして
うちくに美しう御船あしろふくて湊へつかしうはまし舟三艘をおこして御輿
かきとをかんざちべさりそ御舟にたてまつりし 中略 まほくちぬ出させ給ふ
ごしらく我もくとなるどもつなそり中略がの御舟によりて数を三さびお
ろくの舟どもまじりて此泊に湊といふ出ててぞ一の御ふねかざさる 中略

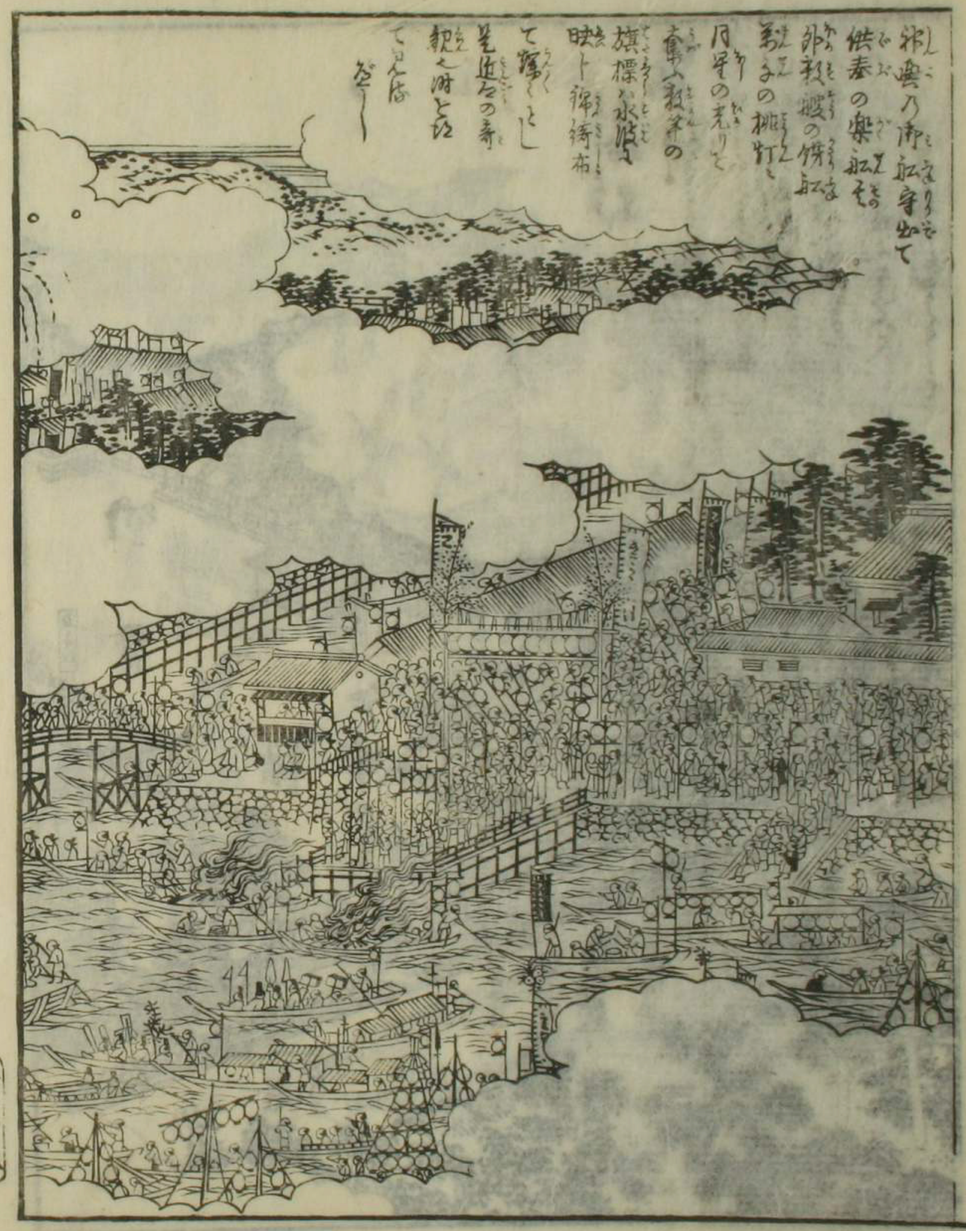
高渫（たかがさ） 八雲御抄に出てきた砂の浦 ○今の泊のみなとたくまれ見へ殊にも是とう一つの加古の湊なるべし

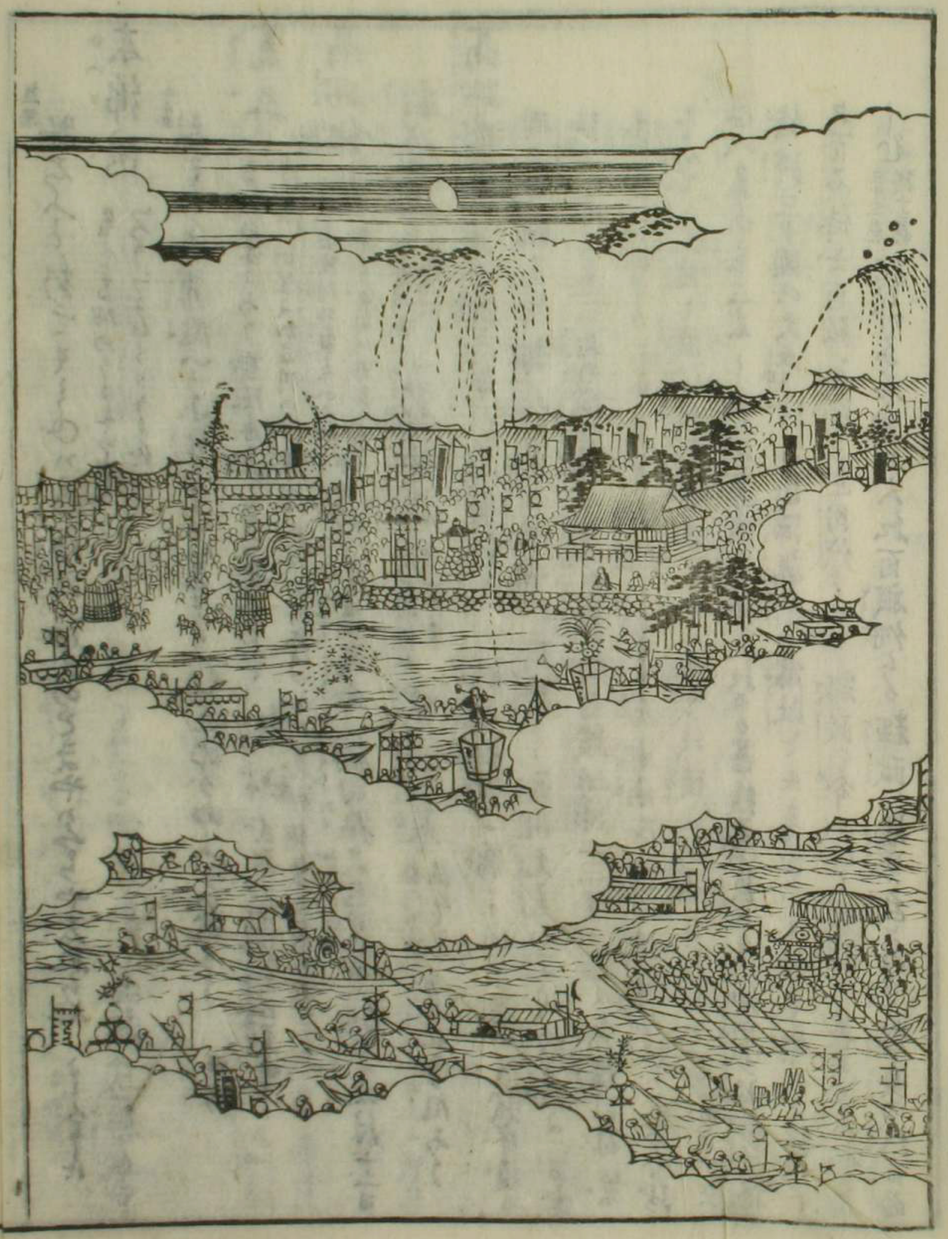
大湊（おほしま） **歌湊**（うたしま） ともみえる砂とは又洋なりし

えもいへらは又を末揮
摂津国志に高渫とも称し此におりしろき家もちて方々をも帯て船が来
まてひさしうまろしでかのる渫に於る人にいふつかれし 名


高砂社
社司
摂社


高砂祭
例年氏人より奉幣
又氏人より神楽の樂あり
左図那須左衛門宗高
扇の的射る氏人より例年くべ
物のさしつもり板人をつとし
○十月八日やあり〳〵て


祇園の御紅葉山にて
供奉の樂人
外科櫻の併紅
葉みの桃灯
月星の光りを
奪ふ数千の
旗標水陸
映ト御待布
て輝くと
是近今の奇
觀と謂ふ
べし



新撰
物たゞく行てもあかれる浦のたまのとまやかくちやなからん　よしんまさ

本綿埼　先にいふ高砂のうちなりとぞ
立そふる浦風いかに寒からん すそむ浦なるゆふされのころ　西行

荒井　高砂の西にあり昔塩屋多し北上塁しとぞ今は臼し故里に加古川の分流ありてまうけあり

高砂神祠　南塩川の南天正の比梶原景行の城趾あり　祭神素盞烏命 稲田姫大己貴命　例祭九月十一日

神社　氏神之祭神大己貴命　例祭九月九日

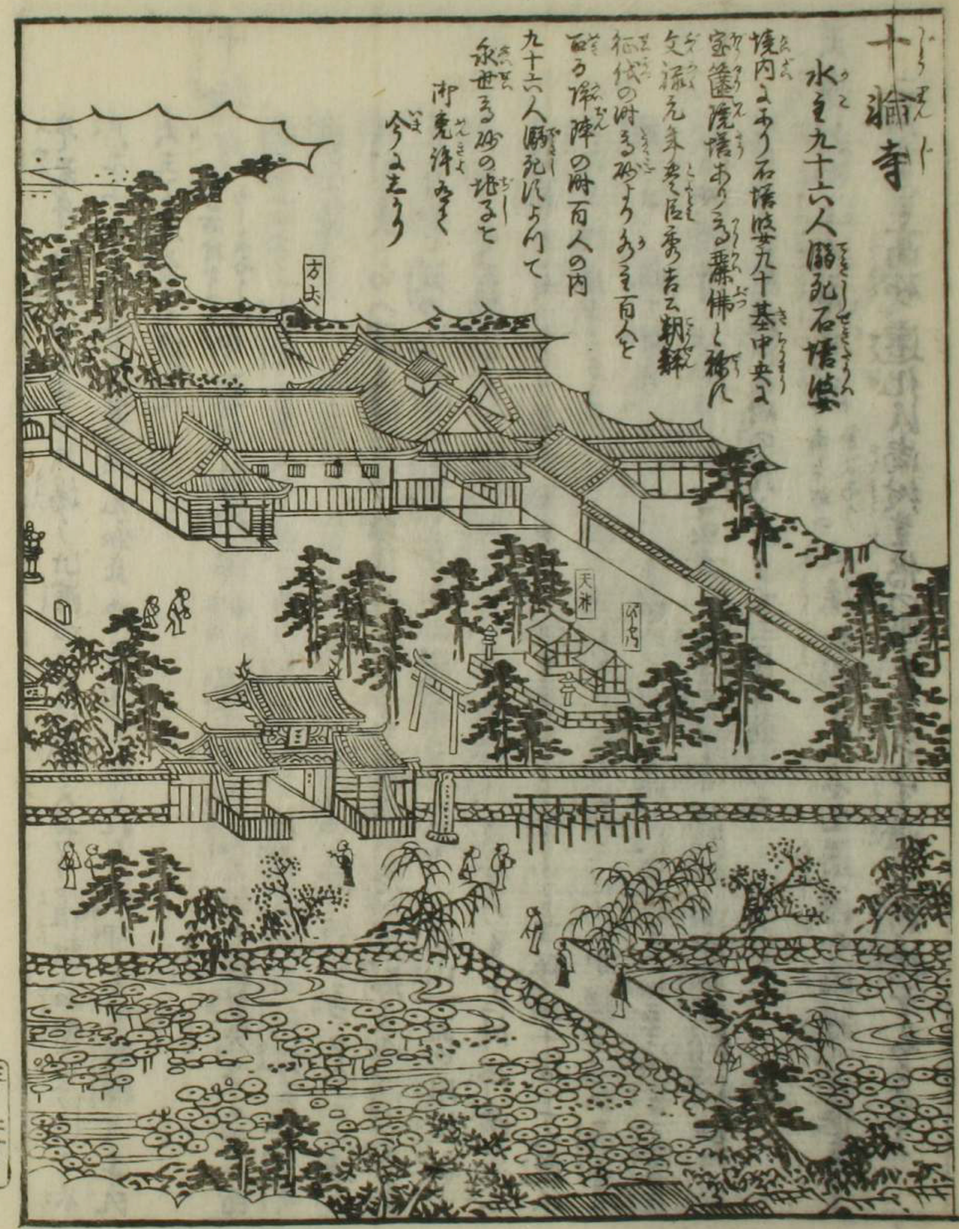
尉姥社　相生の松の後にあり　石鳥井額　故持明院殿御染筆　戎祠二基　南門を出て浜辺にあり　祭祀里民なり

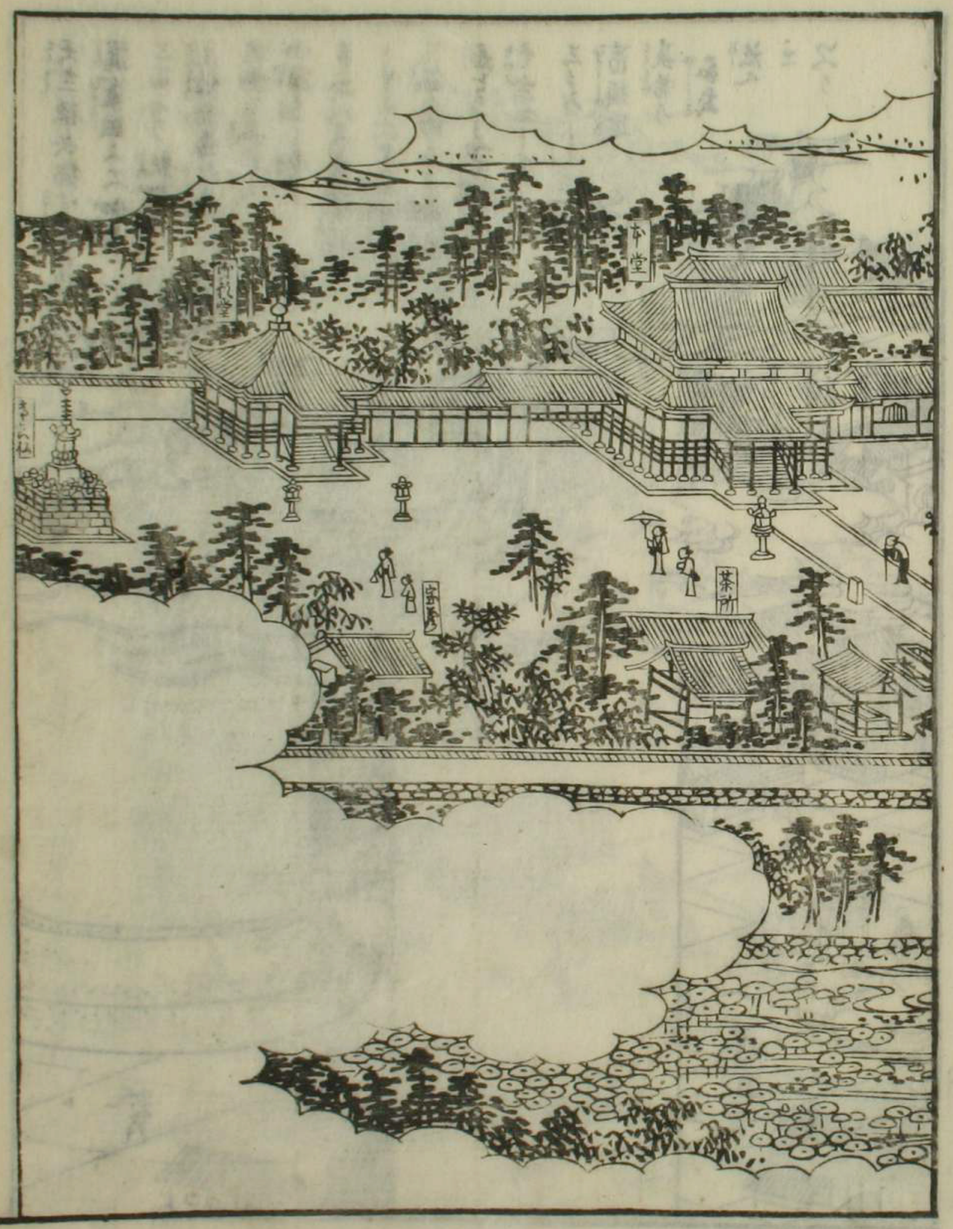
高砂城趾　城主梶原平三景時の末葉景行住して別府長治に属し此高砂の城を守護る時に中国毛利輝元三木の別府に荷担し吉川元長小早川隆景に二万余騎を添られ三木の城へ送らんため兵粮数百艘此浦へ着る高砂より三木までの間に関所を多く居置通路を停め織田信忠は三万余騎を以て三木城を囲む毛利梶原三木へ通ぜん便によって此浦二三里が間に充満して天正八年の春三木ともに当城も落されける其後慶長年中池田三左衛門輝政播州備後三ヶ国の大守として此浦梶原が城趾を定め家臣中村主殿介に知行千石侍士百騎を添られ目代とせり輝政の命として数材を集めて大船を造らしむ　其外五石余の大船百艘繋る輝政の嫡男武蔵守輝貞の代目至

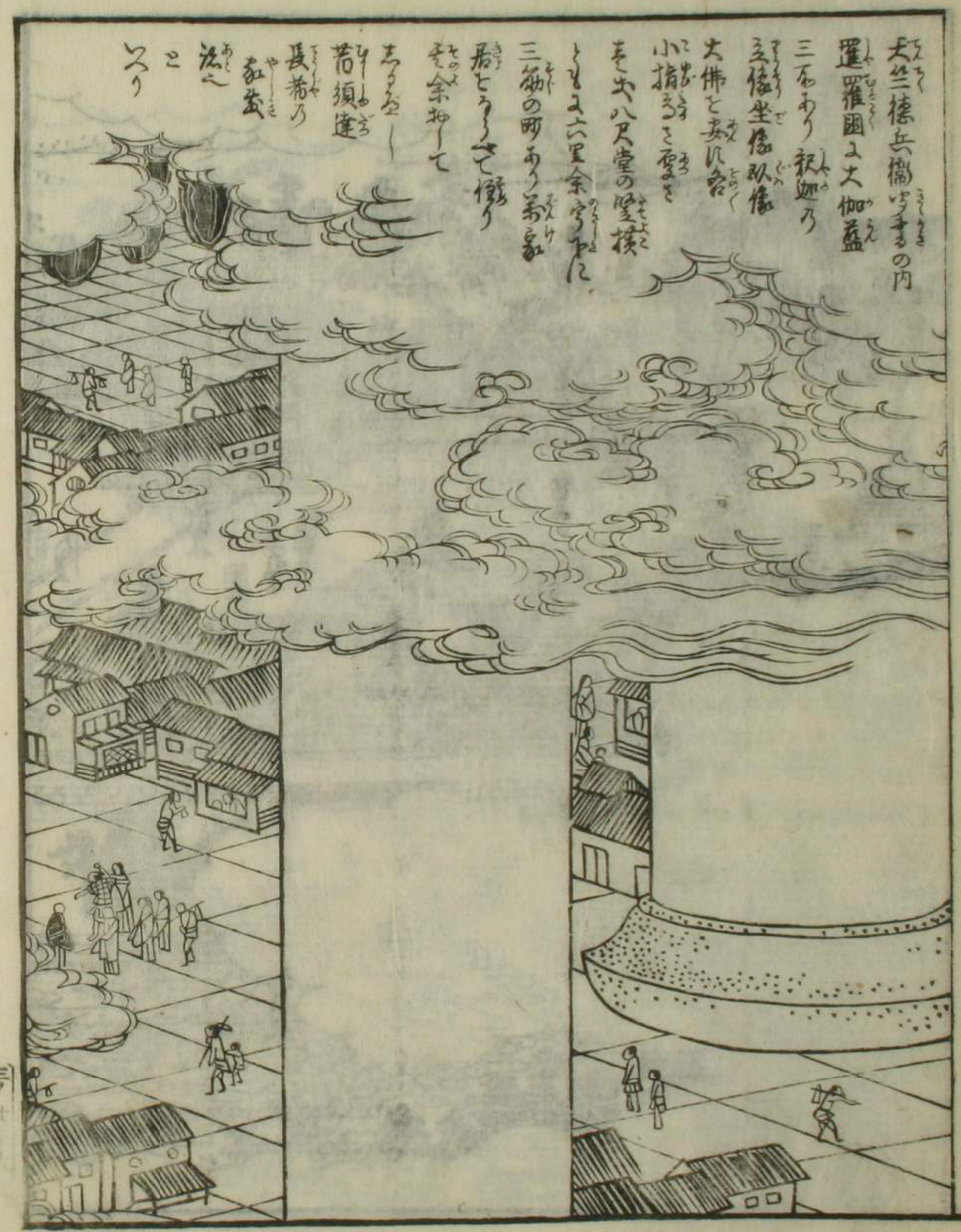
尾上寺に旅二万三千石の船揚り此浦の守護職にあせり羅郭石壁厳しく本戸を十一口に定る又其後元和年中本田忠政これを破却して当浦乃年貢天王を造営ありし之

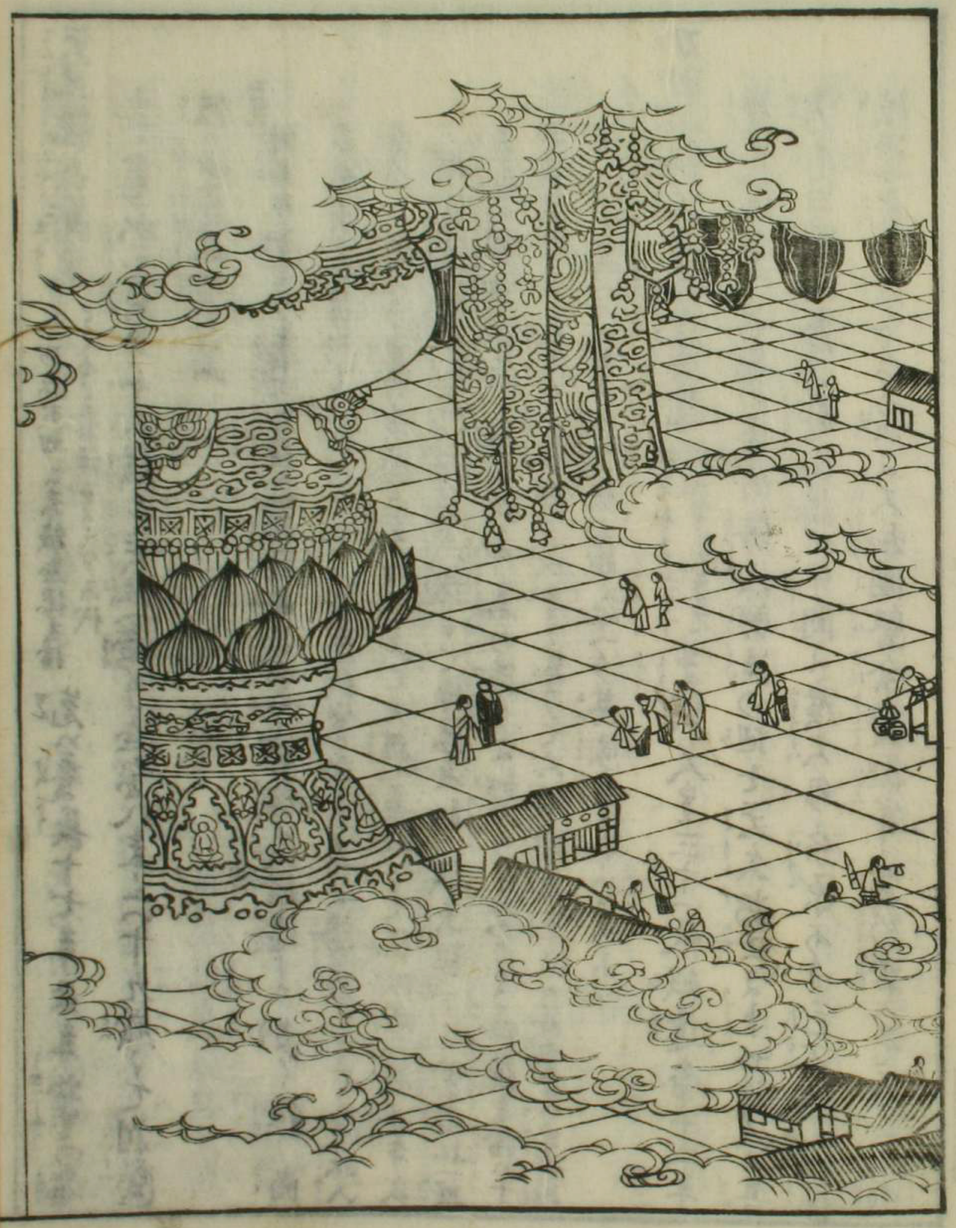
十輪寺　高砂村中にあり　本尊阿弥陀仏 安阿弥作　祖師堂 円光大師の画像左方に十一面観音右方に善導大師又地蔵尊の親縁堂に地蔵尊開基弘法大師中興円光大師之建永二年三月十九日大師讃岐の国にて此浦に御船を寄らせ給ひ漁士治郎兵衛といふ者ある徳に帰依しけるにより衆俗の請ひに応じて当寺真言宗を改め今は西山光明寺東山禅林寺に属して西山一流の浄土林小本寺にて大師二十五ヶ所の拝礼第三番之所徳院建暦の末大師浄土の法を此浦によせ給ひて念仏の地とは定め給ふ浄土宗の法も浦に十万上人度口小松原浄福寺にて大師念仏の御教とふ人なるを得て開山の所縁をもて当寺に納む是に依て地蔵山の旧号を実徳山と改め其僧門の弟子知恩院宮一品尊法親王御染筆之此外寺宝に長丈の教蔵羅漢 長三尺半 七宝の珠数 大和国より法進せらる 御忌の法事は大師遷化の附の月によりて三月に執行る

天空月西上人庵室跡　南本町の大徳知識にて古田道淵の嫡孫也　正徳年中二月廿九日高砂に遷化し尚徒生伝の冊子ありて生涯の行状を志るせり


十輪寺
水を九十六人掘ル石橋
境内にあり石橋長九十基中央に
宝篋院塔あり是佛しる
文永元年建立
征伐の時
百人
九十六人掘ル
永世
今に
方丈
天神


本堂
茶所

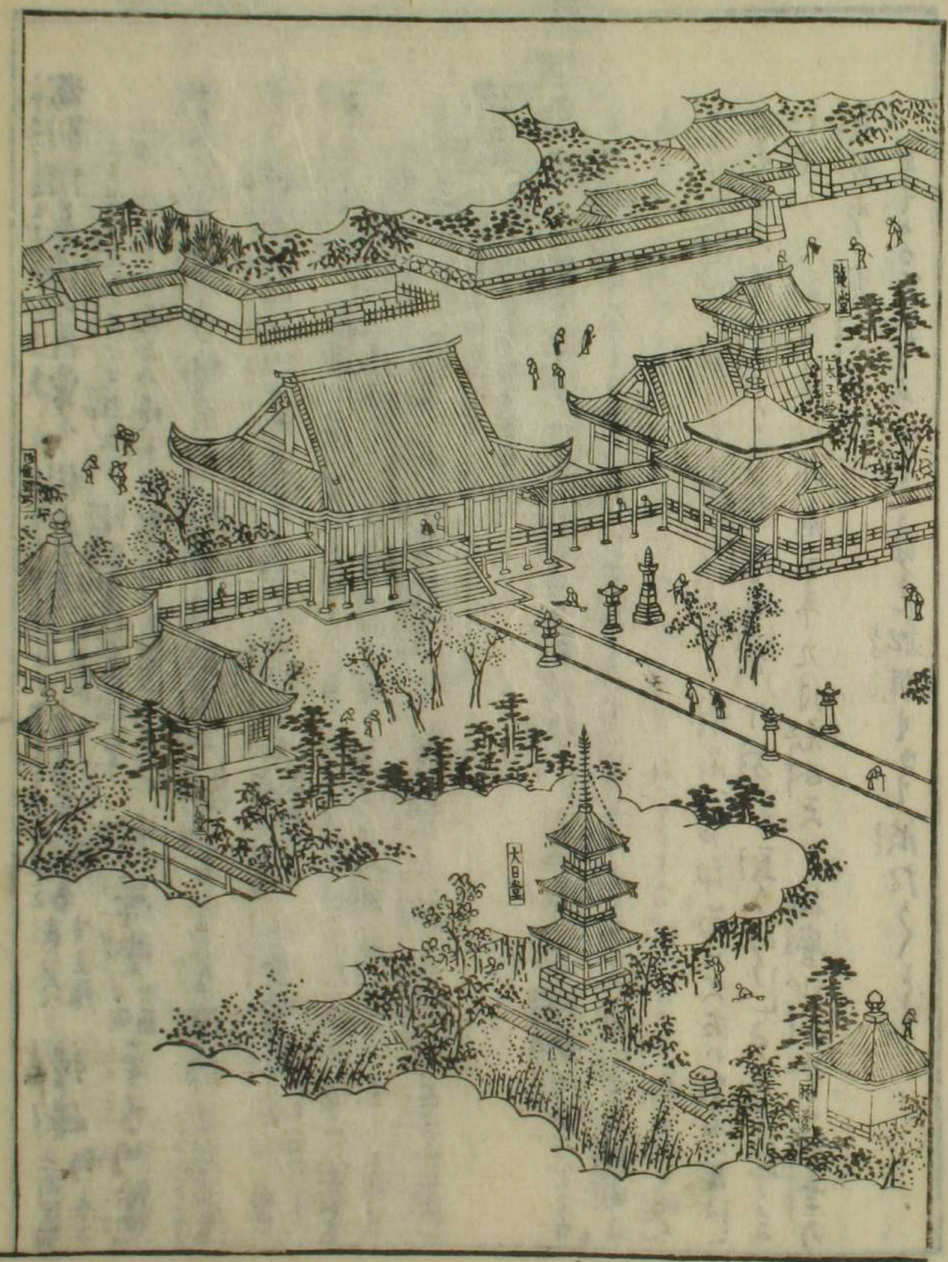

大三德兵衛ゆうまるの内
羅國之大伽藍
三百あり釈迦の
立像坐像孔像
大佛と安貝名
小指ゑ
長六八尺堂の壁横
三筋の所あり第五
長とゝ
余ゆ
ゝ
長者の
流
と
ゝ

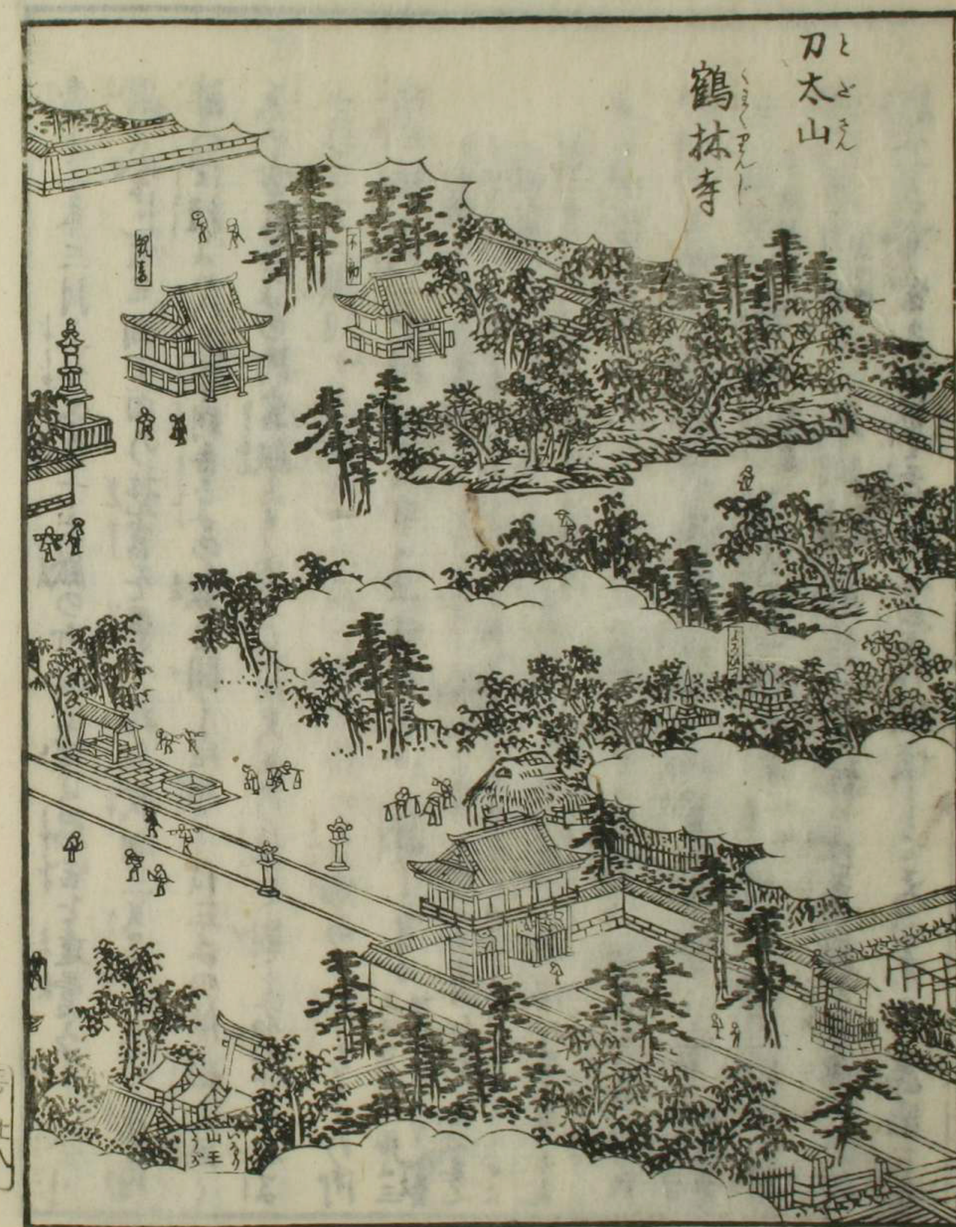


天竺德兵衛宅　る砂糖阪所ゑ未種屋德兵衛　先い慶長十七年丑年出せの者
ゑて寛永三寅年十又歳ゑて天竺に渡り延宝八年六十九歳ゑて刑死
法名を宗心と号ス
附記　往古日本より唐土外国渡海通商の始ゑて九州迄より多く渡り商
右商賣者の所也ちげり多るが御当代寛永十二年ゑ停止せらるて墨船入
貢のゝゑ渡り昔日本通商の船いしべて九艘之長崎ゑて来次氏二艘丹本氏
一艘　荒木一艘　京屋一艘　泉州堺ゑて停止船一艘京都ゑて茶屋船一艘
角倉一艘　伏見屋一艘之船い中華の造りゑ似さりとゝりる故徳兵衛い十
又歳の時より彼角倉の船乃水ゑ迷りて大明南京ゑくゝ呂宋ゑ寄ゑ漂ゝ
くゝゑ通へり所ゑ天竺徳兵衛ゑ漂ゝ甚国書ゝゝのあり

刀田山鶴林寺聖霊院　坂本村より六七丁西ゑあり天台宗　茂創い人皇三十一代敏達帝十二年
聖徳太子十二歳乃御時仏法興流の地と天竺渡ゑ甚
考ゑ曰播州廣ゑ郡山海の中間ゑ廣大の平原あり色万代不朽仏
法繁栄の地ゝとゝ所ゑ大和国槃余雙樹宮より移ゑて遥ゑ用明

帝十二年三月上旬太子十六歳の御時此地ゑ精舎を建営ゑんと秦川
勝ゑ命じて三間に面乃梵宮を営ゑ移ひ釈迦三尊に天王乃像内
陣の巳柱ゑい八大金剛童子の彩を図ゝに像ゑは三尊の仏像を画く
東の方ゑ太子の御宮殿あり内ゑは巳天王乃像を図と右の方の厨ゑ
ゑ太子二歳月十六歳に十二歳三歳合掌の太像あり即太子乃御
頂の髪と抜き世ゑ流ゑ世ゑ抜髪の太子と称ゝ
の遊宮優婆塞ゑ成福寺ゑんゑ
とゝ太子の髪創ゑ今ゑ
巳邑ゑ巳ゑの塚あり是ゑ天王塚と号ス
ゑい世に西の末田南の池田ゆゑ大野　鷲号い日本巳簡の道場に天王寺ゝゝ
ゑ岡山の四辺ゑ人ゝゑ太太十二歳ゑ十六歳の御時ゑて建立
此山外ゑ鶴下上皇を祇宮石清水正八幡宮乃四面今ゑあり
八幡宮ゑ　今函村之　仏殿　九間に面西　本尊ゑる薬師如来　玄日　日光月光威詰天児
仏門天　共ゑ運　玄の他　十二神将　安阿　玉祖　創建の本願い武義国大日身人部春
則ゝ一ゑ有余年の星霜と歴ゑ破壊ゝて天正元年当国三本


大日堂


刀太山
鶴林寺
山王

堀別所長治の再営之　観音堂　同所南面　本尊正観音　長二尺八寸五像　種樓　三間四面
二尺四寸且長三尺七寸　龍頭の竹筧の形あり　護摩堂　同所四面　本尊阿弥陀
接部三ケ所尾上の接と日孔とそれ唐物なり
如来尼右観音物至　共に恵心の作　日護摩堂　三間四面　本尊薬師佛　日光月光
十二神将　毘沙門天　大黒天　千手観音　浪華津田氏建営之　三層宝塔　高四十二間半
本尊大日如来　恵心の作此塔の坤の方に三面の　二王門　金剛力士左右に法華の作左右に運慶の
経蔵　三間四面東面天海僧正建　甚奇南面に芝建地震寄之
稲荷祠　山王権現　宇賀祠十二社　三社神　甚小社也
地震の震筆之
今宝蔵あり

山　印南野　此地今神中の清水の流れ　この曠野の中ところ
之明石郡の西より加古郡の東に流れて二里斗の長流つゝ　今い新田に
なりて人家も多く神谷神寺、神村等谷ごとに建て
先上の播磨の国号の事に　村等谷ごとに建て
てこの中の神人元より明石の漁師　明石加古印南の大古の明石一国は
人より又多く集て神亀三年九月元正天皇播磨印南野に行幸の
長歌あり　略之　秀之
五月雨の降まがふ中を漕ぎ出でて　漕ぎ出でて
印南野の浦の浜風　吹かれ波たつ

義満之厳島詣の記。○ちりまぢいをぞくいづくも心とまる雲ぞ
いるべき神もいかるゝふをゝるれて日方よくまるくあさぢかまとゝ
ゆゝくゝやりまんいづるまいけうあり法あるゝさたるどうちもぐるゝ
いるゝ神のひさち神ゝ　ある孫のけるくゝ行ゝ家ゝ　赤人
後撰　狩人の暮る廉いゝ　神ゝ　みたいてのゝゝゝ行ゝまゝ　けゝ
山　池大明神　鎮座氏神之大池あり　長三丁斗其傍之祠　野寺山高園寺　日蓮神寺村之あり　八幡宮　神村
山　石守古墳　加納浜石守中村之郎　長法減後秀吉之法ひ国州の軍之武功をたゝゝ　詳記
山　天徳山常光寺　村　園照山常観寺　宗徒村
山　赤松播磨守政村墓　之赤村加納浜先寺ふみあり。和歌とゝ法ゝ紅園山合戦之軍功あり室陣加茂撰之居る附家居浦上掃部村家之家ぜる
政村家臣沼田某此所に墓る
印南ゝ稲実之　素幼天皇の后播磨稲日大郎姫とやまるゝ郎イナミの日別そ此国の産之
加古川　此川上牛田の辺りそゝ郎畏るしが駅道の傍そゝ川の東の寺家町陶の口の
辺りと印南郡の入口之ゝゝゝゝ海口の傍之流れ　川の流せまりたるゝ　水源ゝ
丹波国久下村より出く播磨多河郎と称て加古郡溝部とゝ三草川之流合
又一流ゝ丹波氷上より出く播磨荒田の山中之より西脇村そゝ日流と流之甚下流

東条川三本川名より合〜加古の驛の西にて二流となり一流は西より一流は
荒井より西へ流る入

えび人の弱うちまうんむとしあぐとてとてとろ加古川の波　西岳

佛頂山稱名寺　加古川村にあり　本尊阿弥陀佛　宋　○鷲山龍象寺　同村

加古川城趾　加古川村にあり八十間四方高さ二の猶谷地右流門三本別所の幕下人天心の法古岡この城にあり憩息所城主の名は不詳　奥に所ひて書写山に入後古岡に出て忠を

加古川弧名寺にあり　日蓮宗先大神宮門

伯大明神　歴南の庄本村にあり　紀伊國日高郡生石明神の御

弁才天社　中嶋村にあり三方に川あり嶋中に

本村城趾　歴南刑部左衛門長宗徳三年家督を継ぐ本村源次郎勇長男

大津山福田寺　加古川東の郷　本尊聖観音　開基聖徳太子

若い稲荷と号し後に大津山今文殊と号して又村名称稲屋村と云又大

津の新村と云名あり　若加古川の湊の後に赤松氏心元弘の法法華経

宝の石塔城趾　天心の孔に建る塔婆焼て石塔のみ残り文禄年中曹洞宗

及む古き石塔に印南郡河南庄大津稲屋山と見えり

米田村　加古川の西にあり若い米田と書し法花山の縁起に見えり

八十石階　加古川より七八町　川を米田村にあり　○羅山神社考曰播磨風土記に八十岩橋の陰陽

二神及び八十二神の源流の縁起に丹波播磨若狭の小河の番田

此岩橋い山の麓東より西南へむかひ登る中二丁余にて一山一石

をのぼり清流として巻く石階あり高さ八十のいはに云近今の

名にも神本幣の庄天ケ原神吉の里名人神吉の名所の

見えられ耳に聞不神縁流にして石段に踏て回顧をなす波語

物い辰巳にたちかく蓬瀛にひとしく摩耶山の秋月高砂の晴

嵐に心の塵をも吹ならひる砂の遠帆尾上の松原に凡人のたま

ぬを嘲をぞ〜源氏より平氏の乱の眼乳のもぐるふ

ちにて播磨国の巨魁とぞ〜　右振袖稲荷社縁門氏八条の文の意と様

雪ふまはあまれ衣白えに風入さる八十の山石〜　芭蕉翁

八十瀬原　岩根のふりくゝ水流るゝ加古川のほとり眼下に
通ひ雲ゐの遥かに見ゆ

墓乳山佐伯寺跡　開基義眼大師　此寺の建立天正の孔子集に今三太郎久留米義義眼寺と
年号延慶二年正月廿七日建む

△石屋　井田の小池屋村にあり
此辺は清彩田の天池の郷　戸口一間半なる穴天正の頃内の池を堀り切くり三間半り
みて横二間奥へ広間なる一間半に廣く成りて左右天井とも皆大石を以て覆ふ
ふり出上に石の墓穴入てうべし　佐々見が窟とも

腰掛岩　岩屋のゆへあり　傳とくろ見物とも
石形あり　先ゝ以て人の業なり　鞍馬寺跡　井右の左天が原ように丁巳のとよ長さ
十尺周横十間の広あり

毘沙門岩　天正年中の人業なり　自然石の面に　井右の城址　井右村にあり今常楽寺と
毘沙門不動を彫刻と古拙しなえり　寺と建立十年むり不作佐
嶽もの石牌と建る吊矢あり別不長治の一族民部大夫教治居城一万石余天正六年に亡ぶ

黒名歩　井右村の西路傍にあり清水　石歩　井右村にあり今常楽寺
石九一尺三寸五分の完と穿ち歩の上に置り
方に石歩と清水のいを郷の名物にて流れ
流れて流れ流れて人用の益あり　捨て若候仙業の方に流し

道満法師屋敷跡　海辺井佐の小池丁歩岸村に　河海抄に道満法師磯廣園に居る
あり今り民居と成る　佐用郡にも道満塚あり

妙見大明神　日原宮系村にあり
例祭九月十三日

井佐村　磯廣園風土記に曰出雲國阿蒔大和國畝火香山耳梨の三山
相闘と安てこれを法止めんとて磯廣を素りしに國おさまり
で其業不可の紅を覆せて是を廣して磯廣に止る故に井集の所殺と号ける云井佐郡集之

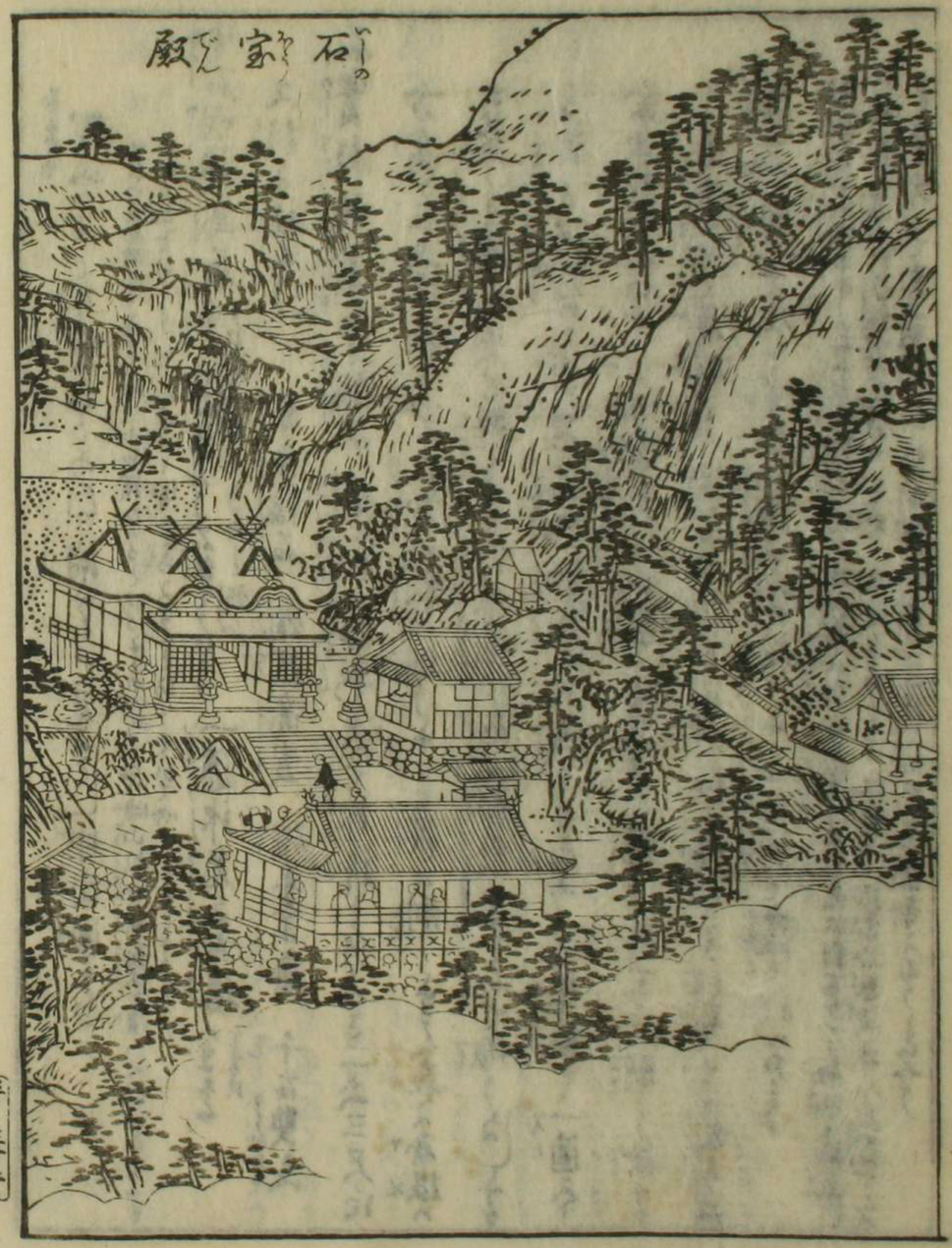
かぐやまと耳梨やまとあひ争ひて見えしに印南國をら
苦いつ見の附こうあるん此三山和歌ひろしたりこれ
かぐやとけそりして今めく得て書みせんとうをいてやるとよろこびうる
生石明神鳥居　井佐村路傍にあり石鼎と名ける
これ石鼎殿二のる歩と称ける

又根の祐あり　華表維石　一道神光の古揚
頭然高岌　確乎不磨　千古雙之

石寶殿　鞍巖室と稱ス　生石村中山腰にあり　石殿を立て神祇と大さ二丈三尺に
方高さ二丈六尺とて社擅の形に似りうと横の側にうる所根の
古墓にも横の見人て拜をる人い宝殿の屋に面に一石を立て似りなしうる
る元より此地い近國の名物龍山石に奉ぎるとして宝殿に一箇不千

余丈の石山の中を切抜即ち切抜る不ると造り其不に側に捨る
さまを古墓と屋根との間いに方ゝにも切りけて抜くとに成ゝる所ゝは
自ら古尚ずて松を生ずに周る水の溜りうるい見抜て窪々しげり

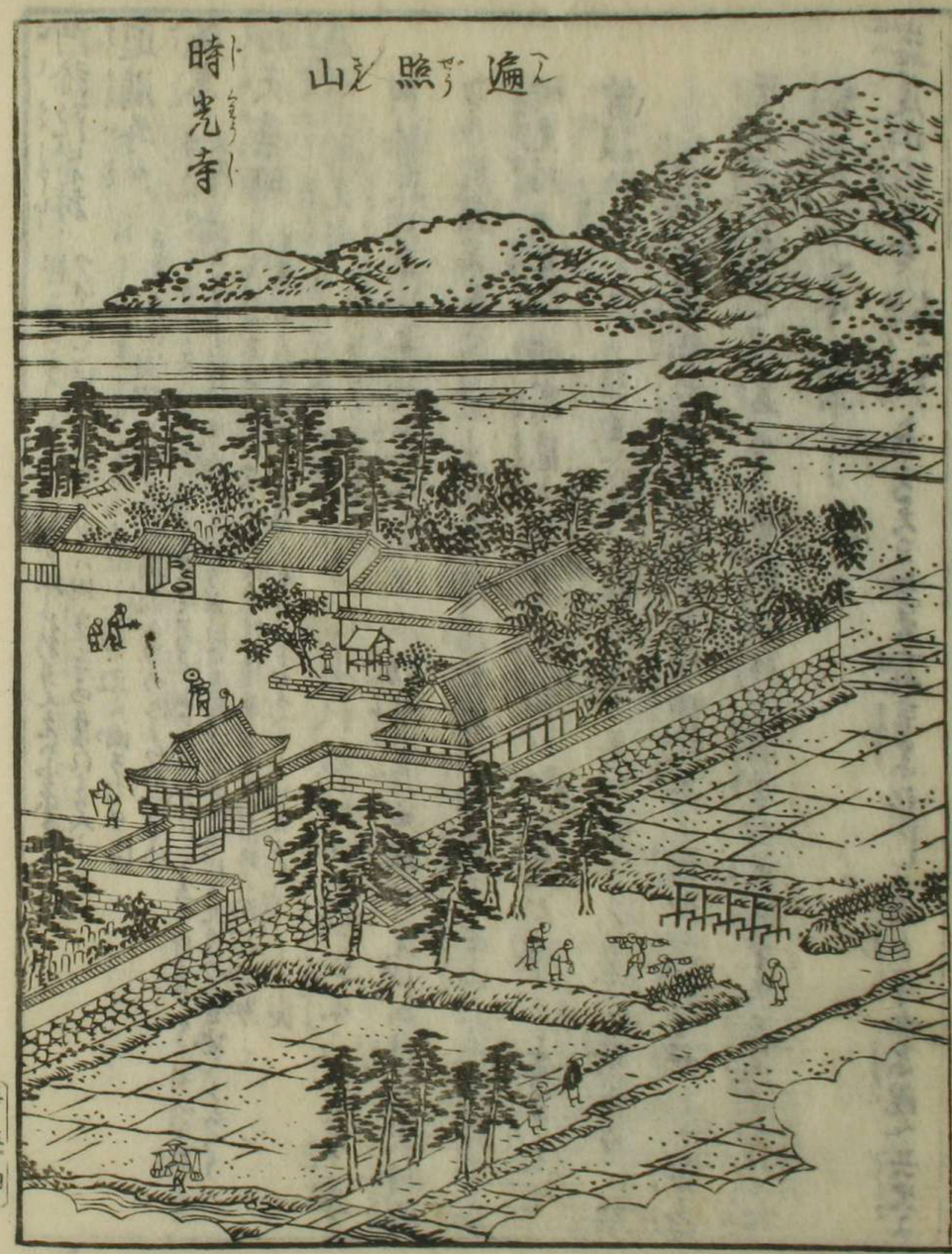
参考天正年中の社記を場て杉社寺社を蔵を赤松別石を動孔の麒麗
て今い生石明神る後明神二神と都殿の法屋とるのこり神徳者に応系不思議神人の感応
るしのとゆづりて生る豊凡○此社の古跡い今英濃の國赤坂の宿長楽寺にあり

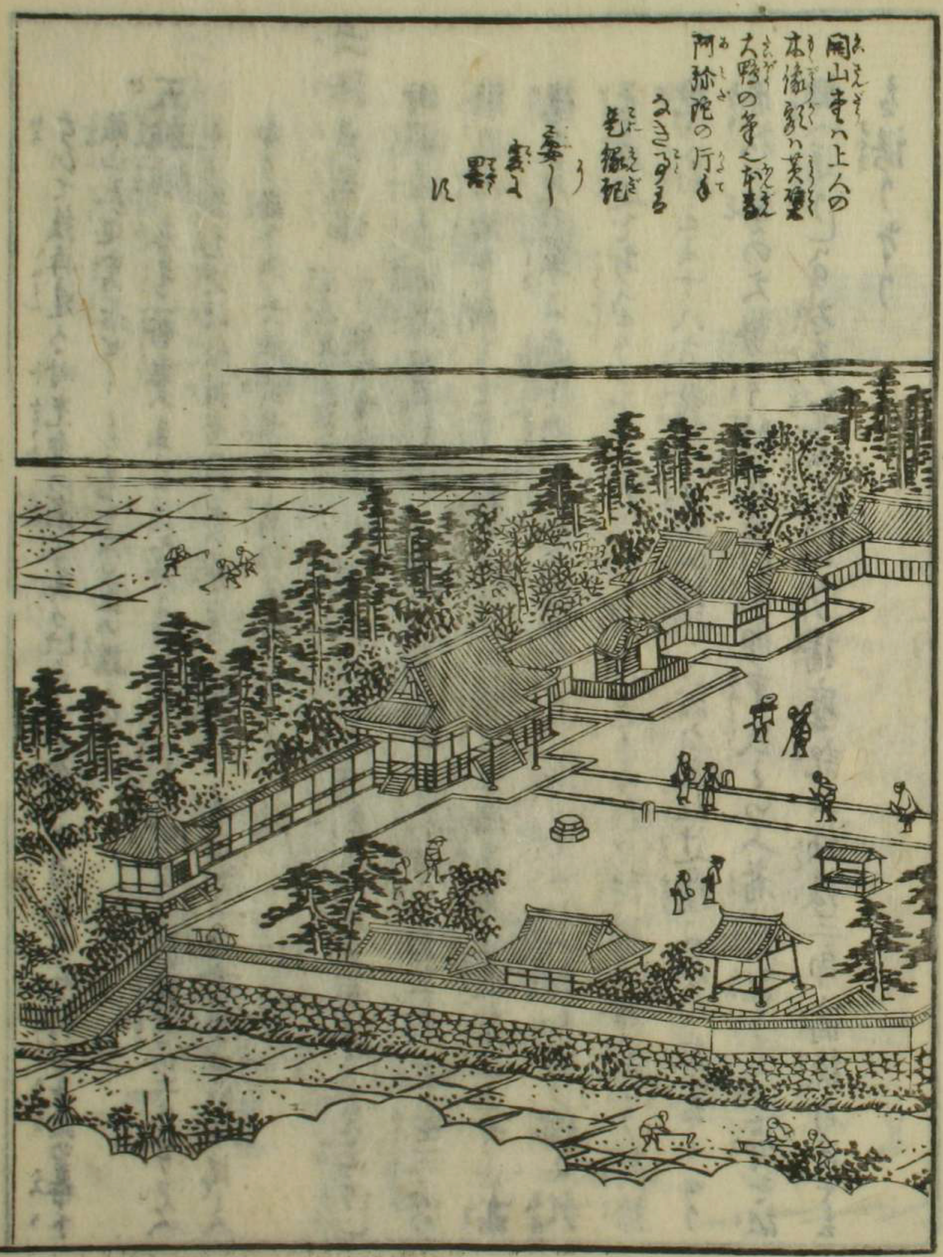

石の宮殿

真人の城

○或る石室の制他と異なり今日工備ざるかと人疑ふ他ろ
くも無うべし只横の側に九ろの穴あり考ふるに義考ふるなり
○後園に妻鹿人形が示して不い石の人形あるゆ人は後世名を名みと云を石人
の傍に石殿三間の物あり云い先輩が塞を作ふ又彩色の名は如ふう
○又一説に生石の名は不の石山に付ての義なり成る山宮いを石の神と祠ろの
心ろ生石いて一の地名なり成る蒙の生石村をもらい山不の産の人なるべ
一の神塞とふ成る山地の奥に考ふる石室あり若や先候計天皇の
御一名氏生石なるもやせいふなるべし成るもみるるやは紀
州三穂の石室の歌に付て俗説人考に石乃國人云其國邑智郡宍粟村
に大なる石室あり古老お伝へく大海ろ名長名の二神の住給へるなり不して即穂が
石室と中古之とへり先濱田より二十里外逸鄙之いづまう先なるぞ尚考へ
龍山石　石の宮殿の遠りい器は石鏃ふて堅穿苦ふり今に多くい石砌溝洩の
恒に見こ細長く切禁の小川より海松に方に賀麦とるの縁一先慶長以来
なりふ禁の塩市村に石工あり山に入の西い奥後市は塩市にて其南の尾後を
龍が臥ふひて龍臥に似ふる岩あり亦に龍をふ又即古への海渡なり
石宮殿のふの後の西の茅人
石舟
かくの形にて中略〜明ふり是
あり長五尺巾横尺五寸二尺五寸
古代の石郷の蓋なるべ〜

阿弥陀宿村　駅名に書あり東西三村家数六十軒ばかり
つゝいて此所に阿弥陀寺の寺くろべ〜
道満寺戸　道満村南一丁ばかりあり清水に早天に涸ろの也
多彩丹の泥鰌ふ先名に満仲の中に元として多ふり近年に上面の尼僧ふり
筑臺　丹生の南一丁ばかりあり山に名に面に名ると七尺丹細の中に元として
大石に掘出せり先古の塊壌と云ふり即此辺若田寺の境内に十九院の遺地と
白矢薬師　中新村の東辺荒村にあり浄土宗法ふり毛砂いを寄ふ方ふべ〜白矢の義濃ふり
遍照山時光寺　保元西阿弥陀村にあり浄土宗西流人皇八十七代後堀院勅願にて寺尊
阿弥陀如来開基時光上人之上人俗性は多田満仲九代の孫源教綱卿
ふり天福元年三月十八日武庫川の辺り浄橋寺西山上人の弟子なり
時光坊と号け澍高徳ふり感徳の阿弥陀と祠りて建長元年
曹根の社の西に精舎を建て後文永十年六月十八日今の時光寺に移
し尚旗宮結縁のるふく小示を阿弥陀宿ふ汲む近村に時光ふ在安
時光谷辺ふと名あり曹根天神の寺の法寺と成在内正月の松
飾禁じて今に至る
岩尾山大日寺　西にあり本尊大日如来真言宗むしい国分寺の末流ふ共史ふ


遍照山
時光寺


開山堂は上人の
本像彫の美麗
大略の事之部記
阿弥陀の行も
みきるる
毛彫紙
妻し
家と
野
凡

たひて後再建ス附光寺の末ゝ也ケ寺荒廃の附りゆゑや別て長治の暮ト
強山左近寓居せ〳〵そゞ見を六日山の構ゝ
五輪塔　年号暦應年三月之外ニ記無る刻字明ゝ〳〵況無るの二字ヨリ又
ゝ若を児源伯後寺龍長の墓ゝ建武三年此地ニ自害のゆゑ記ス
ゆり尚下の六詩武者の墓に元合記ス〳〵
六詩武者塚　至傍村の西訳ゝの傳ゝ延元元年足利ゝ氏九州ゝ責ゝ
附服屋義助播磨ゝ引ゝ児源伯後寺龍長ゝ息三郎高徳三石の
南の山路を敵もとゞ〳〵城てさしの浦へ出脇屋殿ゝ退付んとせ〳〵高
徳さんの軍ゝ疲ゝ勇ゝたるゞ見ゝ〳〵ゆりてゞれば相知ゝる僧ゝ孤
長濱辺を折ゝ〳〵ゝと赤松ゞ兵源太遣ゝ〳〵れば討取ゝ那波ゝ阿弥
陀ゞ宿ゝゝ十八度戦ひ之後六詩ゝ討ゝさんは辻堂ゝ入ゝ〳〵自害〳〵ゝ
赤松ゞ勢の大勢ゝ孫左衛門治郎重氏ゝ〳〵者葬礼〳〵て送骨を故
郷へ送りしゝ者ゝ記ス久〳〵ゝ播磨記ス後三郎高徳の墓ゝ
ゝ誤ゝ〳〵

佛心寺 譯ろより一丁半南小林村 山寺乃燒肉と云て五輪塔あり 滿仲乃石塔とらひ伝へ延享元年山五輪の比又同東の田乃古手より石塔を掘出し其古手に昔より佛心寺の法寺とらひて正月幸乃祝乃日供膳をそなへ来りし

石櫃高さ二尺半長さ巾二尺半蓋の上に五あり又一尺巾方高さ一尺斗石の名蓋に印形蓋高さ小細砂にて拵背折変り又高さ又寸斗の小龍あり中に骨きせの骨うすく侍に似たる物ありて櫃の外廣つゝて埋こゝろ拙る小さきゝろ一村の牛多く記したるあり先山出あり之と恐る又四のごく埋こゝろ

安養寺 後居村 霊峯 釈原寺 他古村浄土宗無年七月六日塩郡踊 ゆゝたる文嘉二年文要法師作ゝ

濃

伊保湊 荒井の西うそ吟奥湊より人昔い伊保の湊 そそ大紅の流るゝ吟もゝ彩井の村あり 彩後ふるき歌に藤さめてきけいたりまぐさいの湊 大江嘉言

加茂明神社 旧名加茂ゝ云あり昔い村中に有りて社有り 正徳明 古畑云奥建郷の名ゝ旧濃笠の家ゝ山上に拵ゝ

法ゝ山ちれ社もゝるゝ中ゝ社をあゝ

飛鉢塚 右中ゝの西ゝあり法華山の用級法道仙人 此塚のゝ上ゝ沖と長ゝ元亨歌ゝ

高麗石 仙人ゝ高麗ゝ乗ゝて紅中の岩ゝ

細堂 奥湊村ゝ石佛の沙ゝて法あり先い附先上人 沙弥の奇ゝ

梅の井 一名不城石塔のゝ奥湊の不ゝ法村成の社

滿の井 奥湊村ゝ石佛の沙ゝて法あり先い附先上人 沙弥の奇ゝ

曽根天満宮 曽根村 祭神菅公の霊 元天徳月命 右猿田彦命 此里の氏神也 延喜元年菅公流罪へ謫遷の附御紅ゝ伊保の湊へ寄せ給ひ社より一丁斗西拾美の岡ゝ此方の絶勝眺望ゝ 元ゝ此宮を捨美天神ゝ称ゝ奉る天正六年豊臣秀吉ゝ 再宮ゝ 櫻門の額ゝ美濃 良嵩二品親王の筆

焼肉攝社名ゝ岡ゝ記ゝ本宮ゝ天徳月命ゝ祀ゝ菅家乃祖神ゝ

菅原道真公三奉議足善弁三のゝ之十一歳ゝて詩ゝ作れ

月耀如晴雪 梅花似照星 可憐金鏡轉 庭上玉彦馨

真紀命文章生ゝ奉ゝ上ゝ下野掘ゝ拵ゝ玄蕃ゝ云ゝ

記ゝ拵ゝ弾琴帝後即位ゝ記ゝ

桃ゝ心三位ゝ銀ゝ中宮ゝ兼ゝ冒泰元年内覧の宣旨ゝ蒙ゝて右大

居る拜せらるゝ時間表を上て先と緯とれども聽されず三年周旬くみんとれども道真
固く辭して受れず且奏曰只今居と居して有るを時の人必これと曉むべき
て春日柳眼中の詩を綴りて獻ずこゝに因て帝法皇各別衣と賜へ
て孔色り尚附冥光の愛のより時平崇くこれを嫉むまして周旬の設へ
を受て除心を脫ぐべ時の源光い帝の罪之の為系寅國と為の後の事あり
もの道真が下の居るのを賤とせば為系蒼根と之道真と憾む心ある
知りて時平先の為の矣と強い崇のの道真を編り紙に玉附時平私の奏
して曰道真が女い孫世親王の嬪
圖稚を巧りしせんとの心あり之後云に帝い後の女の涉りに遊ぶこれの感い
強い延喜元年正月左宰相師の賜せらる道真先と憂へ之ら自明白の
の獄に和歌を作て哀しを法皇の所へ法皇驚き世治ひて先と服んと石に
ものを言蒼根遍して通じ充て其の之道真の子男女二十三人皆黜け是
異あに貶せらる唯小男小女の之道真の子男女の梅あり邸と為る
の餘んで花と開く因て和歌と詠へ、東風ふかばにおひおこせよ梅の花あり
る〜〜〜〜〜〜〜〜〜希甚胸む脫の拭ものを中明石の澤長之
あるまうしと惜まるを宰府の多の治の因く門を閉て出給ひ三年二月
遂の左宰府の薨へ筑紫の安樂寺の葬る年の十九三代実録の十卷と後へ
不器して備器に有の之名と國く類聚國史二百卷の撰菅家集法明抄

菅家日記等の書と撰して今の為に後興福寺の僧寛達入唐の時道真及び
長谷雄橘廣相都良香の詩集希の中道風紀淑望等と共に他の廣の道真
薨して七年後の時平菅根相繼て沒へ其時弟師教天あり先と宰の子孫を
に帝後の注と時て延長元年平寛の獄へ正二位と贈り大富天神と号して
左遷の宣旨及道真の子を記せ〜外記の書物を惡く焚捨ての故の世々
其詳なるを知る者也天暦元年右近馬場の社と建てこれと祀て中の
社と号へ正暦元年右左正二位と贈り易て右政左と為へ正一位左左
菅原朝臣と贈らる八月に日を以て祭礼と設け後創られ諸國番殿して社を
建るい画像と記る天満天神と称へ〜〜〜〜〜二社の数の八是の寛弘元年初て
小社の社の約宰あり先より歷朝の奉幣不絶　又渡殿らふあり渡殿の
在所らふあり在所の之廂正先の為の之世〜其業と繼ぎ寛弘元年薨と
年八十の為紫安樂寺の葬あり〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜て名けて京師らの人佛與と為さて寺勝法規三卷と撰ひて寺庫の為
む後人の祠と道真社の例の建て中神宰相殿と稱へ元年正三位と贈り
隋記　或曰云世の雷神と称へ薨後内裏の雷落て法性坊の所の之と加へ
後の先紀孤國史の之の之〔金〕安言の之〔内〕裏の雷落の之延喜八年
〜〜菅公薨〜て後十六年〜あり抑帝の後言と信〜後ひ〜〜云の不幸の
此へ先帝の不幸之世紀の命之災害不幸い世の為の所表の為を為ち後へ〜〜

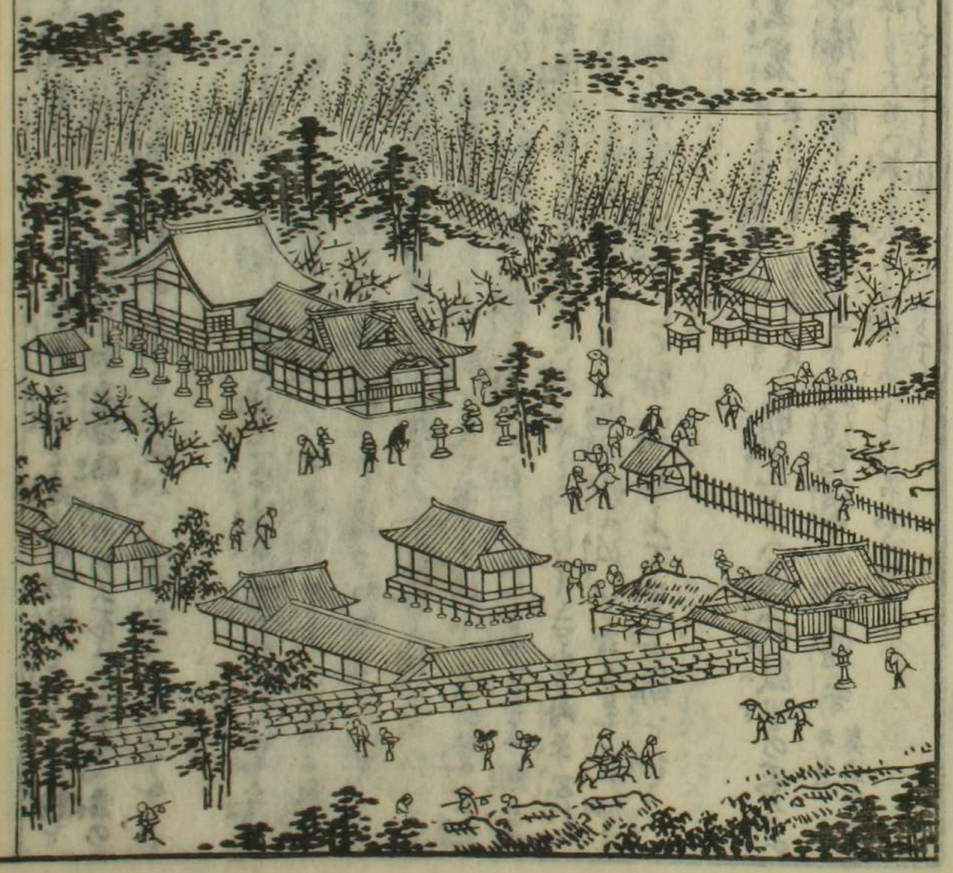
曽根

天神

曽根の松

神殿の甍あり
菅公の遺徳の時
松の葉を植て我と
飛てくれ梅よ（ゝ）
終よ脱よ梅花
尓も憐みの形あり
枝乾去と云るの僅
三尺天満宮地と地るが
ぶく〜南ゆ流る来
西ゆ耳り株のたきと
天王寺八尺ゑるさを式
艮の方より神の向

二十間ヲ乾より巽への
方十二間余其の外は方
〜ゝれて偃蓋のごと〜
又風雪のろふ抄弘ん
ゆを恐まて〜枝く枝
をんてゞふゆ百ゝん
て篝ゝ礫〜釘改の
ぶく〜
翠編者〜と〜
氷乃雲本
ゝゝべ〜
備武近年拾ま〜
鷲樣祈ま〜



なんぞかしこくも帝を呪しまゐらせんとして哉るに祠を建させ贈位を贈り賛賸を
許して人の崇奉せらるゝとぞるは先正天下御勇膽晴麻の紀二年にして御尊帝の
所謂に出るゝのみあらバ雷鳴を以て忿怒のなりとせば凡て其の如くを受けんこと
いと恐るべきことなり
○時平ハ関白基経の長子也年廿にして心猛く事を視て甚だ陰険道真これを患へて
物よりて為に罪あり或ひの入道が賜やむゝ独りは添進席ありて正二位に叙せ
ら三十九にて豊ハ菅公より六年後之正一位太政大臣を贈る和歌とうとしからしく
学文を好み延喜の始め三代実録を撰ばれ人ども先余く独歩の力かはなり
又時の風俗甚だ奢りて衣服華麗なれバ帝制を立て禁じ給へども其の禁を犯
ハ者多し帝是を憂ひ給ひ時平帝と密に議りて自鮮衣を着て帝の側に居
る帝佯て大に怒り百僚の長として國禁を犯るやと御けしきあり時平恐れ入
まどひ退出し扉を閉て後より門を閉る是より風俗頓に改むる其云是正にて如く
正郷によりなバえより側の像者を元牙として邪正を撃ふ者皆其郷に帰るうる
似て甚野鄙之

蓮教寺 牛谷村にあり 牛谷山と云　**黒岩** 日笠山の麓の汀へ出る岩なり黒き故名とす
つり石面十三佛の像を彫りて物ふりたり又後岩祠と云ふ　時光上人浄戒護持の事あり　○**圓通寺** 牛谷村にあり 奥通山と号す

檜笠山 黒岩の上にて男根より大姥へ續く岩なり續き八十の岩橋に似たり 峯多く塩浜ありてまことに絶景なるべし

日本紀推古十一年七月當麻皇子播磨に到る時從妻舎人姫王赤石
に薨ぬ仍て赤石檜笠岡の上に葬るといへり此所なるや

檜笠浦 男根より大姥のあたりまでをいふ檜笠山の麓也

大塩 檜笠山の西麓なり一名塩濱村また 村中寺三ヶ寺天神祠あり
此所よりに曽根的形八家新村など
東西二里計の間塩濱にて竈屋の数は凡百軒なり赤穂新濱
にも勝れり

小綱ひくなるゝ汐汲けり縄よりあらぬ玉ださあり塩濱の浦　西行

的形 大塩村の西の村也宝殿十丁計 村中に神祠三基寺院三ケ寺　英賀日記云宝徳年中當国赤松山へ討手下
向の時郡内の諸士を数多誘ひ集め印南郡に的を立て軍馬の先導を
占軍衆弓馬を試むる所を的形と号ス後に享禄元年三月又同手の
神に祈して各家造りけると云

新古
まとかたのともやは矢をはなつまにつけし
的形の湊のなみださえる波をはつまふたへに近づくも

檜笠山
天津さふ時雨と
ぬれ
三十四

梓弓いる的かたに浦波のひろかひろき浜なとてそまかく
按るに是皆伊勢国的形の歌をまどへるなるべし浪持
くは当国の浦ちかくて人の通ひなるゆゑなかれども浪の下て浪よせかゝる稀て的
のかたといへり今伊勢六郡の郡より三渡りの浜是なるべし 神中ある
伊勢の海たまのまそでかゝるとまうくる人はなかなかとぞうたふ
真淵翁の説にあまの捨やくとて浪丁の浪の寄るまでとはまの浪はまなきしくるを たまの
まくらとはいふて浪丁のよふなそきかゝめかいてはさきをまなせてかてまうて久しく
ていさるもかるかを引くうすいむかしよりもといへ
○是等を混せかへて的形といふ一浪と結て総来しうる事なるや

楯岩 的形の郷内林森村にあり大石あり

的形天満宮 村中にあり むかし数石息継石なりとそ 近世社修造してかの石を神体とし

妙中山海岳寺 的形村にあり 開基行基之旧跡伽藍すて今海浜に礎石あり浴
室田乃宮よおりて風呂屋といふ又清水あり南乃山の端を行基の泉
といふ毎年三月十七日法会あり

福泊大帯祠 祭神神功皇后息長帯といふなるべし 古人弁才天と唱へ俗にこれを本名とまかり
たりといふ是は此浦乾元元年安東平右衛門入道蓮性この海道を
二丁許り築出し墟浜となせり 長さ凡三十余り石を以て築きたり 而して其の
麓の汀の石垣に乾泊として南向に座せり

八家地蔵 八家は荘号にて座は不の小名は
福泊の旧は福泊とまり本座のある石垣にありしを近き頃此所に移しぬ

○此様ハ上の江井村に命せしおもく即是行基七里の池泊の其内なるべし
○英賀日記云永享元年己酉巳月是の浜より福泊ニ至る浦上代妻を誘る舟を八人漕させて古八家といふ

(山)

△**神本庄○幣ノ庄** 神吉とも書て古き名之諸国の名義に此庄の名は上の八十の石楠の縁
ありて此條郷もく号けしなるべし いつの頃かはしらず是を知
らん皇后神功皇后又日向明神の御舟の引しは是なりと見ゆ

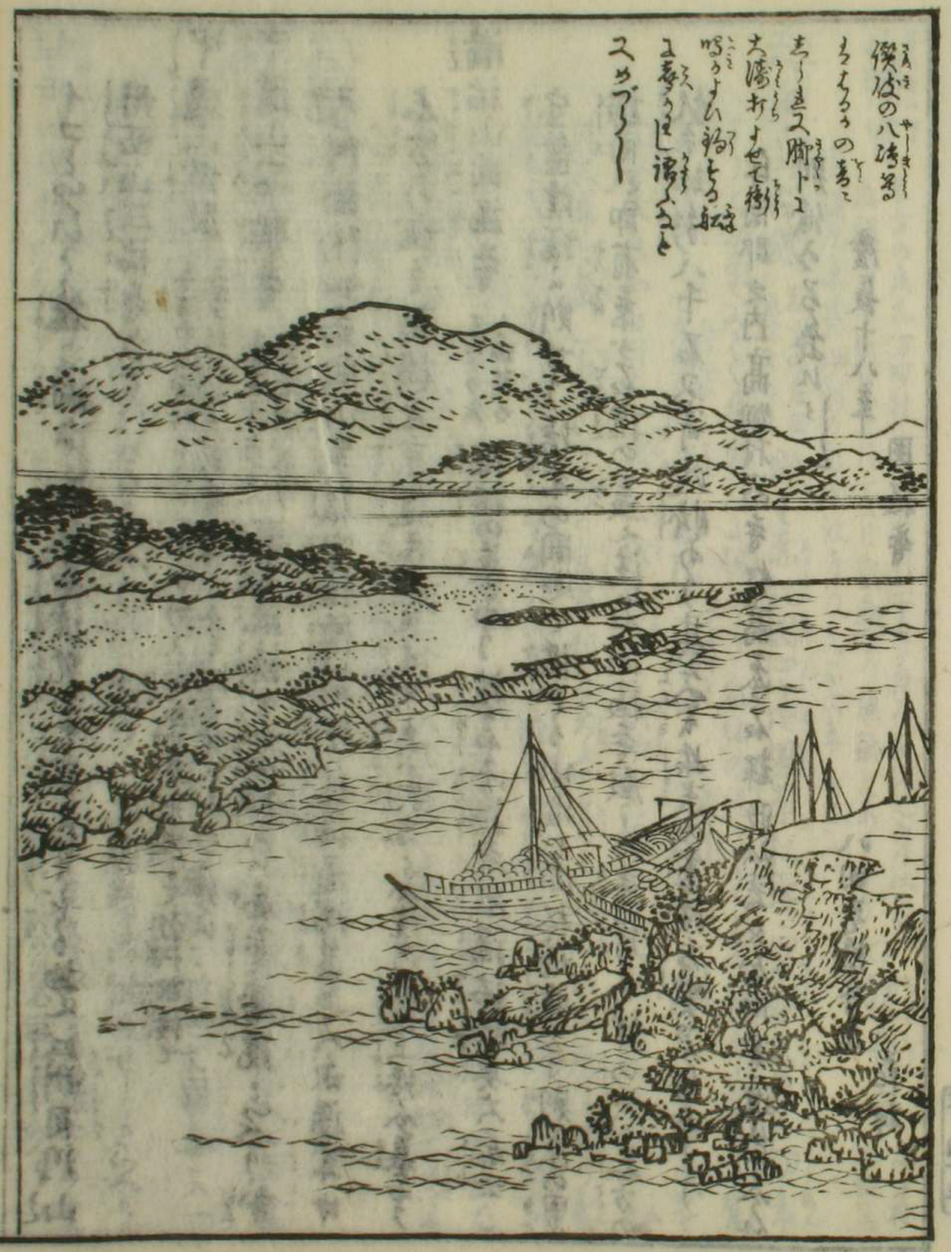
△**都染井** 阿口村にありて阿口の清水なりといへり千水の内に自然石の井筒を囲へり元明帝の御衣を
濯しところといへり清水の下流と水源といふ村中に常楽寺といふ寺又七社権現といふあり

△**印南山報恩寺** 平津の庄 山角村にあり 真言宗開基慈心上人元明天皇の御宇に寺号
を如意と改む又長寿ともいふ 天平年中[illegible] 和銅年中無堂建立境内に弁才天乃
小祠あり前に池あり池中に岩あり澄実石と号く 御所門より編入あり
寺宝数品あり花園院後宇多院鎌倉将軍楽寺浚海上人の書大塔宮制札案
写又御教書紙本巻数御返事ある氏将軍の制札案写赤松義則殺生禁
断の案写義詮の御教書案写義満将軍御教書安堵案写義持将軍御教
書案写赤松円心の書状をはじめ七代の間諸役免除の御書并吉田内生
駒修理亮門弟の湖殺生禁断の折紙等也

若一王子権現祠 寺の南にあり近村幣の庄の氏神とぞ 報恩寺別当職兼帯 宝珠院

土殷孽 是此庄中乃山野に生し産物なして他方は希之和名イシタ

八宮
地蔵
阿波の門戸


阿波の八浦なる
大湊折よせて待
スゝブ〳〵

イコヽろひく様ゑ附ひ石清氣の去中ゑはぎる地え泉州同川山
州西山三法寺ゑるこゝにいゑゝろ
中道山城跡　志方の庄岡村にあり赤松彩ゑ郎慶長居城ゑて数代相続て
元亀の比退城し峯甚屋しゑゑ焼亡地ゑ去て絶ひ
中道山安楽寺　志方の庄西山流浄土宗神めい安楽寺浄ゑゑゑ
細工谷村にあり
る阿弥陀如来開山実存空信僧都中興梅道湯茂上人永禄年中
志方の城主獅橋尼京進秀則再建中興ゑ玄言ゑ浄内赤松上総ゑ墓あり
満祐山圓福寺　志方の庄岡村にあり　満祐の墓あり　法名浄福寺殿満祐性真大居士
宝篋院塔ゑ刻せり塔前の開迦ゑ偽るゑ水溜ハ赤松播磨守則系の男
獅田八郎有系ゑ石塔の墓之法名圓福寺殿ゑて建保年中の人之志方の
紀ゑ知行八千石ゑ寄附ゑり其文義拙束の書法古質ゑ皆ゑ
年南郡之内高畑村ゑ寺紀高参石辯政以系ゑ術寄進ゑ今ゑ
別紙ゑ写ゑ記ゑ
慶長十八年
圓福寺
八田老後寺ゑ
花押

八幡宮　志方の庄志方町村ゑあり近村二十ヒ之村の氏神之宮社基
庄記ゑゑて例祭九月十三日数楽ゑ獅獅上ゑゑゑ天正二年ゑ元ゑ
獅橋尼系荒伊則の居城跡ゑ
天神山古城　志方の庄西　城ゑ赤松図心ゑ男赤松彈正少弼氏範之幼年
飯村にあり
より大力ゑ勇ゑ武勇人ゑ弼ゑ元弘の乱ゑ上の勅命ゑ蒙り宮
軍ゑ属ゑて忠誠ゑ運ぶ赤松の一族ゑ多くゑ以利ゑ軍ゑ渡ゑ
義ゑ比系ゑ白川の合戦ゑ一騎当ゑ武功ゑ行ゑ又永徳の比山名氏
渡ゑ大軍ゑ敗し南朝ゑ美ゑ官軍利ゑ為ゑて多く討死し氏範後世ゑ
紀ゑ考へ南朝後村上帝の聖運もいまゑ衰へ殘今度雑兵のゑ命ゑ
元さんゑ屈ゑ
長男氏義二男家則一族郎ゑ百三十七人至徳三年九月二日腹掻切て死ゑ
ゑ屍ゑ系ゑ拾ゑ名ゑ歳ゑ輝ゑ
大澤清水　志方の庄大沢村にあり十水の孔清冷ゑ清ゑ器月ゑ人ゑ多くゑ来ゑ
大岳山長楽寺　志方の庄助永村ゑあり　浄土宗ゑ地蔵ゑ開基慈心上人高倉
帝の御時託胎祈ゑ胴圓清安地蔵ゑ六十六軀ゑ刻せて國毎ゑ一
ゑと安置ゑ今ゑ寺ゑ中ゑ其一之要慈ゑ安徳帝淳誕在せ〜と云
助永池弁天　助永村の用ゑ溜池の庄ゑ弁天ゑ祭ゑ水ゑ清ゑ旱水排ゑ時ゑ人ゑ祈ゑて龍現ゑ忽雨ゑ降ゑ

高御位

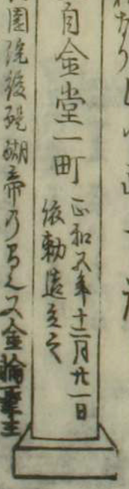
山上より石石まじりの門二
ツ門ゆん丸文と曲杉岩く
らして大古神殿の遺法
軽くふるくしたつ沢組
城法の名乃ゆりたること
神章一夜乃月星民
此に羅参し奥谷の
板垣ずと祝とゆり
うちさき
舞タトノフ祝ダトノフ
種で祝とろるトノフと
人皆大喜ふ岩て舞

高御座山 [illegible]方法華の二郷より見る石宝殿より西の一峯高座明神の坐しを
例祭九月十九日神輿一基山上より寺辺まで行きもどる
見と榊を迎へ高座山と宝殿との間神幸の鈴舎より生石より神
輿と共に雙べ据ゆ[illegible]一夜[illegible]て山を高御座と号ふ神座の
俗に里俗の称る山上の石屏多き宝殿制他の時宴を送り来りし
ものとは又も石屏へ[illegible]る事宝みゆ[illegible]人冷に捨て人まどひぬ
其上若いせ[illegible]の山下波濤の満ち[illegible]ものを[illegible]神[illegible]べ[illegible]
大曾村 英賀記云永享十二月結城合戦の時赤松[illegible]と播磨西海の軍
実の上洛と防ぐ[illegible]附兵粮の[illegible]播磨志方の庄内[illegible]大曾
を[illegible]ふり仮て号く
鷹巣山 高座の西の[illegible]きて岩[illegible]人の通[illegible]峯の松ぐ枝[illegible]
とむ[illegible]年[illegible]国を偶[illegible]揉[illegible]先[illegible]彫村の少補[illegible]山と
唐櫃村 [illegible]の[illegible]の[illegible]
志吹の洞 志吹村[illegible]石[illegible]て神[illegible]
白山権現を上り[illegible]

附録

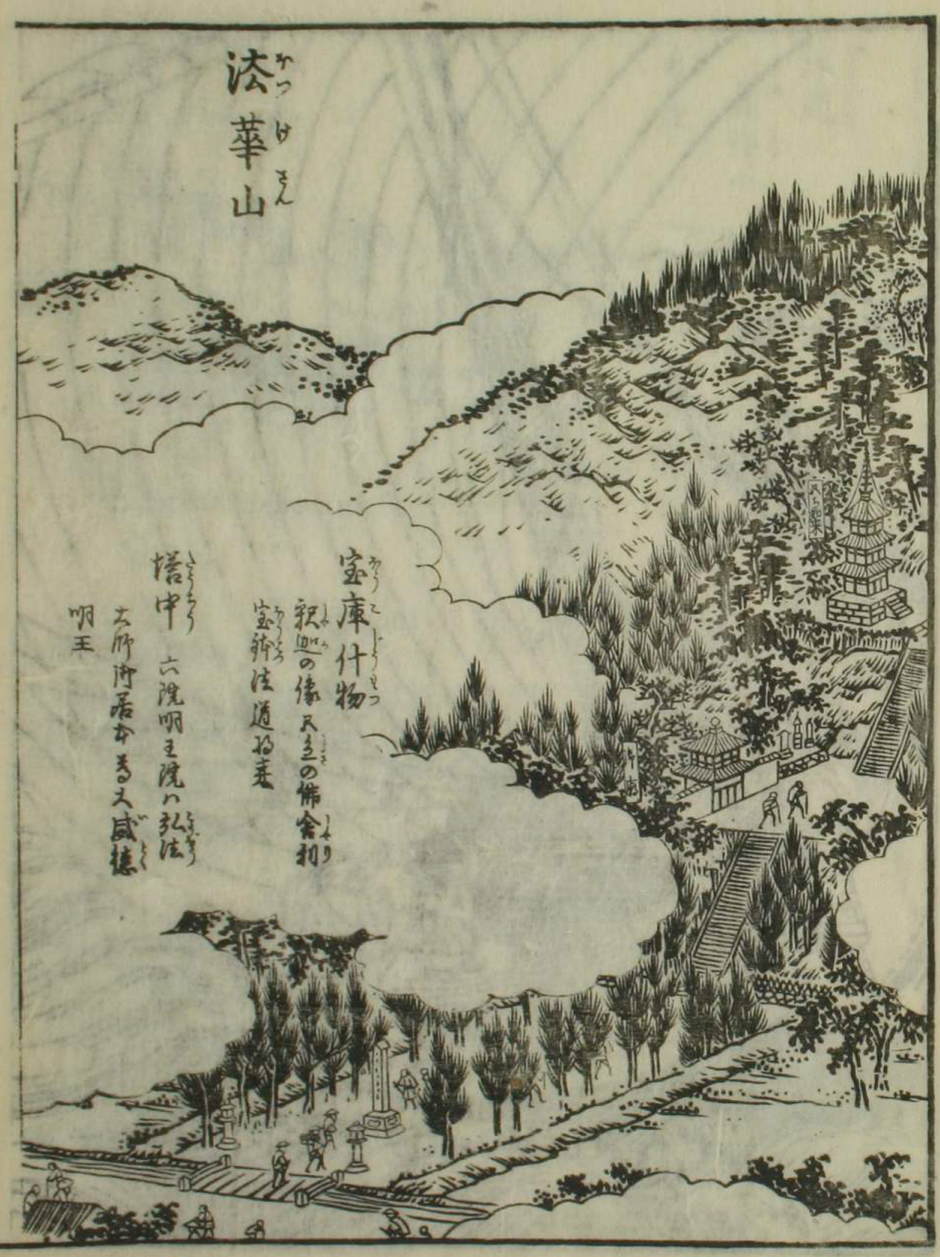
加西郡

法華山一乗寺妙行院 昔は境内廣し[illegible]て加西印南飾東三郡[illegible]
の古碑西の川より三丁西[illegible]三方道標[illegible]
傳曰開基法道仙人なり法道は霊鷲山仙苑五百持明仙の其二
壽命[illegible]十方世界[illegible]神力自在[illegible]副[illegible]
る手大悪の洞像宝珠のごとく[illegible]州[illegible]供来[illegible]仙人
も稱し[illegible]中住来の紙[illegible]来と[illegible]
宮の西南の石上[illegible]
○車停石標 石階の



武蔵車停[illegible]は[illegible]久[illegible]正和[illegible]九十[illegible]代花園院[illegible]湖帝[illegible]
[illegible]奥院の廟[illegible]
○紙幣 [illegible]徳天皇[illegible]寺[illegible]
○巖挂樹 [illegible]堂の[illegible]方[illegible]
○岩英 [illegible]山[illegible]物飯[illegible]
守傳曰大化元年秋、紙師義[illegible]

孝德天皇白雉元年
泰創開基法道仙人
西國二十六番の札所
かなる観世音菩薩一尺八寸
黄金佛天竺伝来
服士毘沙門不動
服檀元三大師画像毘沙
門堂門法の釜 三層塔
又紀如来 常行堂阿弥
陀 九層石塔安産の傳
ユウロウ 開山の御教堂内
輪蔵 奥院法道仙人の廟
巌屋の内にあり 法華
読誦の石像あり


法華山
宝庫什物
釈迦の像 天竺の佛舎利
宝経法道仙人
塔中 六角明王院の弘法
大師御居なる文殊堂
明王

法道
龍神の
祈事

又法道かの神を祀せて其者と名ふ石屋をこしらい御厨の祝祖まく
私ふ祭ひ奉りしかしこしらひ神い堂く祀ふ小社中の来儀恭く
神ふ付て宝を祀来ふの雁紗のごとし石屋大ふ弱き山ふのぶりく
撰と祈せばふ其儀元のごとく社へ祀ふ入り入り其ちの帝ふ奏聞し
ふしび扨ふ御不豫の事ありて法道を召さる招念をなして王敬承
恭ま〳〵ふり其後白雉元年勅をなて伽藍建立就て即紗事ふ
其後法道一詔を蒙して仙苑ふ帰る

我化有情乗此地　留置像神舎利羅　一渉斯境所求得
永出三途見仏陀　し余法道の景む雑舎不く往くはして今尚在ちるもの証

孤云宝神ふ祀神ふ人の雲あの信の拝紗ふ立ふ文彩ふ揚神祀堂
ふ云ふのあり云ふ右物信りの寄ふ拾遺ふも入う
又孤云物語りの寄ふは又ふ御厨年貢の米私ふ与へ奴い石屋が史其ふ虫ふ化い
法道邪術の妖人ふ化し強て実ふ法道が方ふ化ふ不ふる方ふ行ふ〳〵ふ後世
元信の妄言恐しべし

播磨名所巡覧圖會巻之三終

早稲田大学図書館
011188882007